

第七章・北方地区

第二節・居留地の周辺

(1) 文明の洗礼

●山手の隣——この章での北方地区は、北方町ほか六カ町で、面積は一四一ヘクタール、西之谷町と諏訪町が丘陵地のほか、一帯は平坦地である。平坦地は山手の丘陵に沿っていて、千代崎川流域である。

この地区は、ほぼもとの久良岐郡北方村(町)の地域に相当している。近世の北方村は『新編武蔵風土記稿』に記され、概要を知ることができる。ここでは、幕末以後から述べることになる。

この地区の特徴的なことは、開港後、外国人遊歩道の一部となり、山手居留地の隣接地として予想外にひらけたことなどがあげられる。そして直接間接に居留地の影響をうけて、今までの農業地帯が近代化していったことである。

●外国人用屠牛場——慶応元年(一八六五)五月、幕府は横浜居留地覚書にもとづき、小湊の海岸に外国人のための屠牛場をつくった。小湊の海岸の一帯を五つの区画に分け、慶応元年の五月か



屠牛場の全景 (1870年) <『市民グラフヨコハマNo.46』より>

ら十月にかけて、イギリス、アメリカ、オランダ、フランス、ドイツにそれぞれ貸渡した。しかし明治七年ごろになるとこの辺に人家が次第に建てられ、十二天へ移転することにした。明治八年五月から十二月一日までにフランス以外の各国の屠宰場をさらに八王子海岸に移転させたのであった。

●兵学塾——一方、外国人遊歩道の道すじに当たっていた、北方村のうち天沼は、外国人の交通が頻繁であった。丘のふもとには東漸寺があり、農道をはさんで農家が点在し、それに平地一帯が水田のため、灌漑用の大きな琵琶池が拡がっていたというような村落であった。

こうしたなかで「天沼の兵学校」と呼ばれる私塾が慶応年間に設けられた。明治二年来浜した松居十三郎という人は、「私は兵学を研究する為に、北方天沼の兵学塾へ入ったが、塾と云っても、別に建てたのではない。農家の空屋を借りて開いたので、それは丁度東漸寺から海岸の方へ行く曲り角の処にありました。塾長は太田源蔵と云って長崎の人で、其頃年令は四十一、二でした。私塾をここに開いたのは、慶応年間の事で……」（『横浜開港側面史』）とっている。塾生は二〇人ばかりで、兵学のかたわら語学の授業があり、語学は、初めオランダ語を教授していたが、後フランス語・英語へと変化していったという。

●にぎわい——外国人ブ拉克はつぎのように記している。「北方の天沼は、三年前は居留地からかなり離れていた。横浜の

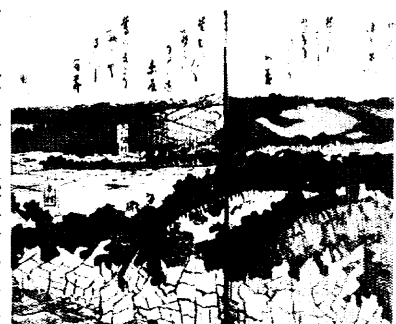
山手に配置されていたイギリス駐屯兵の兵舎によって完全に遮断されていた。二・三軒あった家は農民の農家か、あるいは、まわりの農民に日用品を売る家であった。今では外国人の住宅に完全に囲まれているので、商売は主として、兵営や外国人消費者に外国製のアルコールや食料品類を売ることである。また、非常にふえた日本人に物を売る二・三の店もある。サウス・キャンプを下ると新道が始まっている」（ブ拉克編『ザ・ファー・イースト』一八七一年三月十六日号 大野利兵衛訳）。

天沼は、新道の造成にともなって一段とその交通が増し町並がととのいはじめていた。

●軍楽伝習——天沼の南の妙香寺では、官軍兵士の軍楽の伝習（訓練）が行われた。明治二年九月、薩摩藩は、当時英国の軍隊が横浜北方妙香寺に駐屯して居たので、三十余名の年少者を選んで横浜に派遣し、三年九月七日から、軍楽隊伝習を受けさせた。

このときの伝習生の一人中村祐庸（のち海軍軍楽長）の書翰にも「薩摩から横浜にきた」とし「……後北方の法華宗妙香寺に転居し伝習の終迄其の寺に在住致候」（小田切信夫『国歌君が代講話』）とある。伝習生は、一二歳（一人）を最年少として一六歳から三七歳（一人）の三〇名であったという。

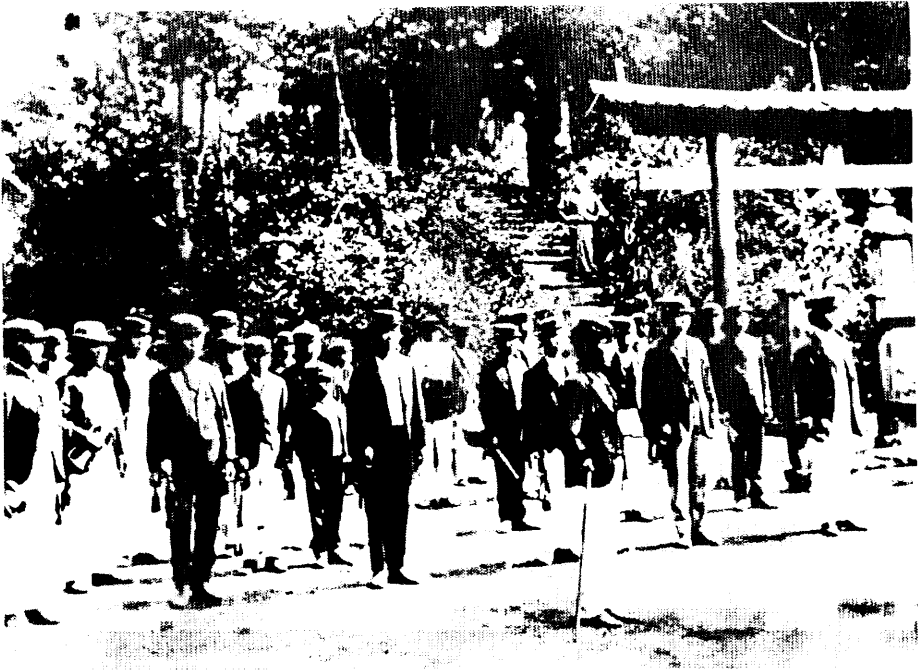
このおり英人指揮者フエントンによって、君が代が西洋好みの旋律で作曲され、のち明治九年中村の建議により、十三年七月、宮内省の林廣守作曲、ドイツ人エッケルト編曲によって現在の君



天の間（天沼村より北方村遠見の景色）
（横浜土産）より



北方晚鐘（横浜地名案内より）



薩摩藩の軍樂伝習（横浜市図書館提供）

が代が生れたとしている。（前掲書）いま妙香寺門前には「君が代由緒地」の石碑がある。

地元には、伝習は妙香寺のほか、上野町あたりの湧水の豊かな涼しい所、又は善行寺付近でも行われたという伝承がある。

六年二月「学制頒布」によって、学舎「就蘭学舎」が東漸寺内に創設された。しかし八年二月に寺が焼失したので妙香寺に移り、北方学校と改称された。この明治六年北方村のうちに街並みがととのつたところを諏訪町・上野町・千代崎町とした。

●ビール会社―天沼は近代産業のビール醸造の土地として脚光を浴びることになった。すでに市街化して、灌漑には使えなくなった琵琶池の一部を残し、まわり一帯が埋立てられ、ビール醸造技師のコーブランドによって、明治二年一月、ビール醸造会社スプリング・ヴァリー・ブリュワリー（Spring Valley Brewery）が創立された。

天沼の山腹に湧く水が、ビール醸造に最適な硬水であることから、ビール製造地となつたのであった。

ここで造られたビールは、居留外国人や外国人兵士に評判となった。コーブランドはこの製品をもって、山手居留地一二番でビヤガーデンを開くなど、大いに売り込んだようであった。以後、震災まで、ビール会社はあとで述べるように幾多の変遷をたどることになる。

●田園風景―明治十四年（一八八二）の『横浜実測図』はその



国歌君が代由緒地記念碑（妙香寺入り口）



麒麟麦酒開源記念碑（キリン園公園内）

明治14年横浜実測図 (部分・北方地区)





北方の天沼 (1871年) — 現在の諏訪町 (市民グラフヨコハマNo.46)より



妙香寺の谷 (1871年) — 現在の妙香寺の下、上野町1・3丁目あたり (市民グラフヨコハマNo.46)

頃の地区の状況を伝えている。

北方村は山手の丘すそ、一本の道路に沿った宅地である。現在のワシン坂下、北方二丁目は、ちょうど千代崎川がカーブする地点で、川口はいまの小港団地と新山下三丁目境あたりである。この川に沿って屠牛場の大きな建物二棟が見られる。そのまわりは宅地で、所々畑のほかは水田である。海に突き出た十二天山の岬のかたわらには、小さく外国人居留地の区画がある。

この図の作成年代からすれば、まだこのときの屠牛場は、小湊から十二天への移転は終わっていない。小さな外国人居留地は、いわば山手の居留地飛地のようなもので、景色のよい十二山の地点であった。

北方村の北側は山手の丘沿いに道路、その道路には南に向って宅地、民家が並び、上野町からV字型に山手の丘に喰い込んでいく。V字の一边は天沼で、いまの千代崎町一丁目から諏訪町の坂、ここはすっかり宅地化されていて中央部に沼がある。

もう一边はいまの上野町四丁目で、これも妙香寺のかけ下一帯が宅地化されている。V字型の交点は上野町の一・二丁目で、細長く道に沿って宅地がみられる。そして、これらの道から十字型に本牧村の台方面へ通じる道があって、その両側には千代崎町が続いている。この宅地のうしろには千代崎川をはさんで広い水田がつづいている。この水田は川が境となって、本牧村の水田となる。

さらに水田は西之谷の谷戸田につながり、わきには一本の道、道の片側は立野山を背に細長く宅地がつづく。その向い側の丘は台地で、現在本郷町三丁目につづいているが、台地は一部の畑、畑のはじは雑木の林で、その下は善行寺、寺のわきの山すそに墓地がかたまっているが見られる。

この頃のことについて、地元の人はいう。

「慶応生れの祖母の話によりますと、北方は一面のたんぼで、居留地の異人さんが馬車に乗って写真を撮りによく来たそうです。撮られると命がとられるヨ、といわれていたので、外人が来ると、そっと稲穂にかくれて様子を見ていたものだそうです」(北方有志座談会)

●居留地隣——十五年(一八八二)の四月になると、横浜区(主に現在の関内)と一緒にこの地区では、上野町・千代崎町・諏訪町(天沼)には「汚物清掃規則」が施行されているし、町の道路などに手が加えられている。例えば十六年の一月には北方村字竹ノ花三畝十四歩(三四三・八平方メートル)が居留地の関係でつけ替えられ、四月に県令は、政府にたいし、居留地から上野町に通じている道路の下水が、設置してからすでに十余年たち、土留の柵はもちろん石垣も大破している、ついでには外国人の申し出もあるので改修してよいか、と願いだした。政府からの許可があったので、県令は土地を買い上げ、道路をひろげ、工事費四、四一六円四九銭をもって、その中央に下水管を通したということもある。

た。

●ビール余話——さきのビール会社は外国人居留地に隣接していたこともあって年ごとに盛んとなっていた。明治十八年、ビール工場には日本人も参加し、内外人の共同経営によって、ジャパン・ブリュワリー・コンパニー・リミテッドが資本金五万円で設立された。コーブランドの事業も継承され、製品は「麒麟ビール」と命名された。年間三千石(約九五、〇〇〇ガロン)ではあったが「横浜ビール」として有名となり、あらそって愛飲する人が多かつたと言う。二十二・三年頃には輸入ビールに頼ることなく、国内の需要をまかなうまでになった。東洋の各地からの引き合いが殺到し、外国産ビールにすこしも劣らないまでになった。

しかし、ビールは外国人専用の酒として、日本人ではハイカラ好みの一部の人が、ビヤ酒と称して愛飲していたにすぎず、一般が飲用するようになるのは日清戦争(明治二十七・二十八年)の頃からであって、酒というよりも、この頃は一種の滋養飲料水としようなもので、酒屋よりも薬屋で売られたものであった。

ところが、諏訪町をはじめ、この会社周辺の人びとは、これよりも早く、明治二十年の初めから飲用していた形跡がある。

「うちのひい爺さんは慶応の生れだったが、天沼の外人から、ビールを貰っては飲んでいたといひます。はじめは眼をつぶって鼻をつまんで一気に飲んだが、そのうちに『旨え旨え』ってしよつちゅうやっていたと、祖父から聞いたことがあります」(千代崎町老

人談)

(2) ビール会社

●海水浴のはじめ——明治二十二年(一八八九)四月一日、市制施行によって、この地区では、山手外国人居住地に隣り合せていた諏訪町・千代崎町・上野町、それに山元町(根岸地区)の四つの町が早くも市域に編入された。このことは、二十二年頃すでに町としての形態がととのつていたことを裏付けるものであった。しかし、これら以外の北方は全体的にまだ村のたたまいを見せていた。

しかし字小湊や梅田(本牧村大字北方)はまだ完全な農漁村で、十二天を中心として美しい浜辺がつづいていた。わずかに近代的なことといえば、その海面で、外国人による海水浴が始まっていたことであつた。

海水浴は、明治二十三年(一八九〇)、字梅田の佐藤五郎吉、増五郎が発起人となって、許可をうけて浜辺の区域を決め、むしろなどを敷き、衣類入れのかごを備え、簡単な板かこいをした有料の脱衣所を設けたもので、多少の飲食物を供した程度の水浴場が設けられていた。

●外国人散策——この海水浴場をもつ小湊は山手の丘のはずれでもあつたので外国人の姿も見かけられた。

「だから坂(ワシン坂)を降りると小湊海岸に出た。この坂の

山手の丘からの眺望(一八七一年)——現在の新山下一・二丁目には海であつた遠くに横浜港の船が見える(市民クラブヨコハマNo.46より)



山下の海水浴(明治後期)

左手にケンタッキー・ティ・ハウスとかたかなで書かれた見すげらしい喫茶店があった。それから真つ直ぐに東へ進むと、本牧海岸、この海岸には根廻り二〜三メートルもある老松があり、このあたりからはひょうびょうたる海原遙かに房総半島を望み、時には保田海岸から館山、鋸山がかすんで見えた。

右尾根先端近く、今のPXのある辺りから山手警察署前の耕地を貫ぬく幅三〜四メートルの堂々たる新道が出来た。この新道はワシン坂を下って来た旧道と結ばれ、尾根に住む異人さんが、土曜、日曜ともなれば、三頭立ての黒塗馬車でわだちの音高く、または乗馬服に山高帽といういでたちの単騎の紳士、はては横乗りの婦人とくつわをならべ、意気揚揚、肩で風を切って行き来する。我々はこの新道を馬車道と呼んだ」(神谷徳蔵『本牧の想い出』)

北方地区内の西之谷の方面も、同じようなもので、丘にはさまれた田畑、それに丘には樹木がうっそうとしていた。奥まって善行寺があり、入口の北方皇大神宮と一本の道でつながれていた。

「善行寺の墓地は広く、樹がいっぱいありました。むかしは土葬だったので、塔婆と提灯の間から、青白いリンがチョロチョロ燃えているのが見られました。本牧から夜釣りの帰りのときは、この道を通りますと、火の玉に出合つて真つ青になって飛んで帰つたもんです」と地元の人はいう。このようなありふれた田園地域ではあったが、少なからず外国人がもたらした新知識、技術といったものが、この地域に入り込んでいった。

●ビール醸造所——その一例として西之谷の入口(現在の九九番地)に個人経営のビール醸造所があったという、地元の老人の話がある。

「醸造所の工場は大きくはありませんでしたが、立野山の北側の山すそに、ビールを貯蔵するトンネルがありました。戦時中は防空壕に使われ、いまは、ただのほら穴で残っています。立野山一帯は櫻の森で、その森の下の湧き水がビールに適していました。うですが、保坂さんは甲府から出てきた人で、熱心に研究したといひます。このビールはモリビヤと言って評判が良かったそうですが、残念なことに資料は残っていません。明治二十五年頃、醸造を止めたといひます」(第三地区有志座談会)

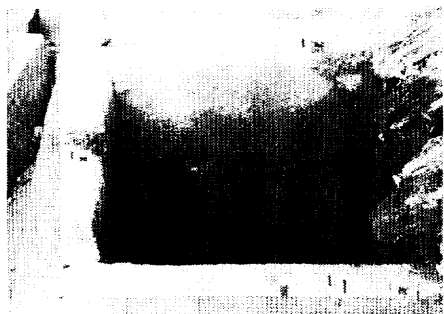
この醸造用といわれる井戸は四五センチメートル四方、石の井げたがある。水は、戦災で水道の給水がなくなつたとき大いに役立ったが、今は空井戸となって利用されていない。またトンネルといわれるのは、今では分厚いコンクリートで入口がふさがれているが、立野山に製品貯蔵の横穴として現存する。

西之谷の入口、皇大神宮の周辺には商店もならば、部分的に住宅地を形成して、上野町に隣接していた。

上野町は早くから町となつていたが、町のなかで目立つものは私塾「博友館」ぐらいのものであった。塾長は谷平三郎で、夫婦二人が教授していたという。

●氷すべり——しかし、こことて、町並みは道に沿つたわずかな

通称ビール井戸——いまは使われていない(西之谷町九九番地所在)



部分で、その背後の平地は、おおかたは田であった。いまの大和町と立野との境にあたるあたりには、氷すべりの場所があったという。立野山が南をおおっていたため、ことのほか寒く、山下の水田は冬になると、いつも一面に氷が張っていたという。

「ケヤキの美しかった立野山の下に、外人の氷滑り、土地の人が言う名称だが、今日で言うところのアイススケート場があった。古老の話によると、田んぼに寒中だけ水を張り、凍らせたリンクで、それは粗末なものであったという。それにしても天幕を張り、よしずをめぐらせて、盛んに滑って、話題をまいたという事である」(藤村久直『山手物語』)

このことについては、次のような外国人の談話もある。

「石川のガケ下に、横浜の仮のスケート場が出来たが、砂利や砂が、ガケから氷の上に落ちてくるのでダメになった。すこしあとに、射撃場の麓にある水田がスケート場になり、つい最近まで毎冬開かれた。その場所が建築用地になり、最近使えなくなってしまう」(ジャパン・ガゼット横浜五十年史)『市民グラフィコハマ No 41』(所収)

●北方泉のあたり——また小湊あたりは「北方から小港まで旧道でした。山の根には学校があり、その前には、加藤養魚場の金魚池がありました。家はかなりありましたが、長屋が多かったです。道つぶちには大きなケヤキが二、三本、千代崎川あたりまではずうっと田んぼでした。電車道、千代崎町、本郷町方面も畑

で、千代崎川から向う西之谷・上野町から向うも田んぼで蓮の田がたくさんありました。これも大正までのことで、その後埋立てされました」(同座談会)

山の根の学校は北方小学校の前身で、箕輪半蔵の家屋と土地を一時借用していたものであった。また加藤養魚場はのちに上大岡(港南区)に移転した。

三十四年(一九〇一)四月一日、小字小湊・泉・竹ノ花・天沼・上野・西之谷で形成されていた本牧村大字北方は、同村の大字本牧本郷そして根岸村とともに、市域第一次拡張によって編入され、大字北方は北方町となった。

●ビール会社と電気鉄道——明治末期の北方地区は、天沼のビール会社とともにあった、と言っても言いすぎでない。

ビール会社は四十年二月、近藤廉平らによって資本金二五〇万円、その名も麒麟麦酒株式会社、年量三〇〇万ガロン、海外にも輸出する企業となった。これまでにいたるのには、明治十八年のジャパン・ブリュワリー・コンパニー・リミテッドから、二十九年の株式組織への変更、三十二年日本醸造株式会社に改称、三十九年には資本金六〇万円が一二〇万円に増資されるというように、次第に業績を上げ拡充されてきたのである。しかし、この製品の輸送手段は、桜道などで山手の丘を越え、石川や元町の川辺からダルマ船に積み込むという大変なものであった。

四十四年(一九一一)四月一日、横浜電気鉄道が開通。この地



氷すべり場の跡——右側一帯(上野町一丁目二〇番地あたり)



天沼のビール会社〈横浜市図書館提供〉（明39年頃）——手前が琵琶池



いま一つのビール井戸，北方小学校構内，道路沿いにある



ビール井戸記念碑——中央部北方小学校構内，校舎は改築前



横浜電気鉄道の走る風景（明治44年頃）——上野町停留所付近

区では上野町・千代崎町を通ることとなったが、これは地区にあって町民の利便になったが、むしろビール会社にとって最も都合のよい輸送手段が確保されることとなった。

電気鉄道の引込線がひかれ、製品はいったん千代崎町に集積され、そこから麦田のトンネルを通って、短時間に船積場に運ばれ、輸送方法は非常に効率化され会社の事業業績はますます上っていくこととなった。

明治から大正震災にかけての北方町は、ビール会社の周辺以外は、さして地区の変化は見られず、相変わらずの田園豊かな土地であった。特に、海に面した小湊、きり立った山手のがけ下（現在の新山下一丁目・新山下二丁目）は十二天の岬まで続く海岸線で、景色のよい所であった。

●チャブ屋——この景色のよさと辺びな立地とが買われてか、小湊は大正初年、石川町の大丸谷とともに、チャブ屋の営業区域として指定され、二〇数軒の店が開かれた。チャブ屋というのは、遊興の場であった。チャブとは横浜言葉で、語源は『横浜市史稿・風俗編』によれば、「ちやぶ屋は英語のチャップ・ハウス(Chop house) に其語源を持つて居ると見るのが、最も正しいと思はれる。『チャップ・ハウス』は現在の所謂簡単な料理店の事である。簡易食堂であり、安直料理店である」とし、接触の多い外国人居留地に働く人々や人力車を扱うリキシヤマンなどが「聞き覚えの耳語に当てはめて、『チャップ・ハウス』から『チャブヤ』に

転じた。この『ヤ』そのものは、けだし横浜言葉として特異の情想を含んだもので、『何々ハウス』『何々ショップ』『何々ストア』のようなものは省略され、すべて日本語で言う『何々や』になった」と述べられている。

もともとチャブ屋は外国人遊歩道の頃から、沿道の根岸・本牧方面に散在した茶屋がその起源といわれ、明治十五年頃には本牧に春木屋という店ができ、営業の形態がととのったという。

明治二十五、六年頃に入ると本牧に約三〇軒、北方に一〇軒、桜道や地藏坂あたりに五、六軒というように散在していたという。大正に入って、行政上から一区域での営業の方針がとられ、関内や埋地・地藏坂あたりのものは石川町の大丸谷に、本牧方面や北方のものはここ小湊に集められたものであった。通称「本牧チャブ屋」というのがこれであって、震災までは、外国人専門として営業された。

(3) うたかたの繁盛

●山下海岸埋立——北方地区は明治期の町並み形態のまま大正に入ったといえるが、そうしたなかで、大正四年（一九一五）十一月、山手のがけ下の海岸一帯（現、新山下一丁目・新山下二丁目）が、横浜埋立株式会社によって埋立てられはじめた。面積九万七、六九六・五七坪（三二・二九ヘクタール）で、大がかりな工事であった。



埋立直後の新山下（横浜市図書館提供）

「埋立は全町一遍ではなく、初めはいまの町内会館の場所（新山下一丁目八番）から通りの角（同一丁目九番）までを埋めました。いまは千鳥坂からこの陸地に降りられるようになりましたが、まだ埋め立てたばかりの土地には海水がじかに寄せてきましたね。漁師は満潮になるとバンドホテルの裏に船を持っていき、引き潮になってそれを洗い、また上げ潮になってから洗った船で帰っていったものです。」

工事は浅野総一郎さんがはじめたんですが、大正十一年頃からほとんどが朝日生命のものとなったんだそうです。あとのことになりませんが、一般の人に土地の売却がはじまったのは、戦後の二十三年で、一区画単位で、坪七二円でした」（新山下町有志座談会）

この埋立は、港の外周部として、町域全体に港湾関連施設を設置するためのもので、港湾関係の企業を誘致して工業地域を創設することにあった。従って直線の運河、山下橋から小港橋にいたる直線道路、およびこの道路に並行する平坦部が整然と造成された。平坦部は山手のがけ下一帯だが、勤労者の住宅用地として計画された。

工事はつづけられて、大正七年（一九一八）六月から、浅野造船所が鉄工場の用地として、小港地先の四万〇、四六一・八七坪（一三・三七ヘクタール）を埋立てた。この結果、がけ下に沿う海面全部が埋立られた。埋立が終った土地は市域に編入され、大正十二年（一九二三）一月三十一日、新山下町と命名された。現

在の新山下一丁目、新山下二丁目、新山下三丁目の町域の大部分がこのとき形成された。ただし、この埋立地は、これまでの北方地区の既成の各町と比べると、異質なものであった。

この頃、隣接の地区は、相変わらずの田園地帯であったが、この地区はチャブ屋への外人客と、ビール会社とが、地区を特徴づけていた。ビール会社は大いに業績をあげた。

●ビヤダケ——大正期の天沼のあたりを童話作家平塚武二は、つぎのように記している。

「冬の夜明け、寒い寒い、まだ暗いもやのなかを、馬は鼻から湯気のような息をはきながら、カツカツとひづめの音をひびかせています。小高い丘にあった大きなビール工場へいくのです。『ビヤダケ』と言うビール会社の工場です。ビールは正しく言えばビヤードですから、ほんとうは『ビヤード』とか』と言う会社なのでしようが、それを横浜の人達は『ビヤダケ』と言っていました。ふといふとい、れんがの煙突が立っていて、それがどこからもよく見えましたので、煙突といえはビヤダケを思い出すほど、ビヤダケの煙突は知られていました。

このビヤダケで使うビールびんが、さぎ山と、ビヤダケのある丘のあいだにあった電車通りのあき地に、山のように積みあげてありました。荷馬車の仕事は、そのビールびんを積んで、ビヤダケまではこんだり、ビールをつめたびんを箱づめにしたのを積んで、港の方へはこんだりすることでした。馬車に積まれたビール

びんは、馬車がうごくつと、ガチャガチャとぶつかりあい、すばらしくにぎやかでした。まるで、ふしぎな音楽でも聞いているみたいですよ」(平塚武二『風と花びら』)

この作品のなかのビヤダケというのは、横浜の特にこの地区の方言の一つである。ビールを英語ではビヤード、これに横浜人としてはビヤードも酒に変わるのでビヤダケ、このダケが転化してダケからビヤダケとなったものであった、と、この地区の老人はいう。

地元の人に、次のような手記や談話がある。

「……上野町銀座の屋は、木枠に納めたビールを積出す荷馬車、空びんを回収する荷馬車が往来した。ビール会社専属の荷馬車で、ギーギーしむ不調和の音を出せば、空びんは、ガラン、ガランと割れるような音もたてた。加えて、道路を汚した馬糞がほこり風と一緒に捲き揚る。しかし町の苦情にはならなかった」

(藤村久直『山手物語』)

「ビールのビンがぶつかつても割れないようにするため、表わらのストックで作った「ツト」をビールビンにかぶせました。これは今の港北区太尾町あたりの農家が材料持で作り、ビール会社に納めていたそうです」(千代崎町有志座談会)

「ビールの地方配送は、箱屋がつくった四ダース箱を馬力が幼稚園前まで運んでいました。そこから貨物電車で載せて、掘割川にゆき、ダルマ船に積んで出すのです。市中の場合はツトをかぶせ

木の箱に入れ、馬車で運び出したのです」(同座談会)

「天沼には、池や赤レンガ倉庫、そのうえうしろは山というふうで、ビール会社はちょっと陸の孤島でした。それなりに会社の所はむしろひっそりとして、夜になっての女性の通行は危険でしたね」(同座談会)

「今の北方小学校のところに馬車馬小屋があつて、キリン園公園は池でした。そこにはキリンビールの赤レンガの建物がありました。そのあとに鉄筋五階建てぐらいの高さの工場が増設されました。いまの北方小学校のうらには、横穴式の倉庫がレンガで出来ていましたね。震災の時にはそれが崩れ、死傷者が出ました」

(同座談会)

●まわりの活況―大正期のビール会社は、多いときには従業員三千人に達し、妙香寺下にはこれらの人の長屋ができ、ビール会社から下った上野町や字竹ノ花は、急速に市街化し、商店が多くなっていった。

元町に通ずる代官坂道の両側にはずらりと商店が並んだ。地元の人々の街並みについての話。

「お代官坂に通じる上野町の登りは、雨の日も、風が吹いても、朝晩の道は勤め人の道で、賑やかに混んだ」(前掲『山手物語』)

「坂に並んだ商店は奥まった妙香寺のすぐ下に当り、いまの上野町三丁目一―三番と妙香寺台との町境のところに北方亭がありました。浪花節専門の寄席で、関東節で有名になった浪花亭綾太郎

などがでていましたが、綾太郎が毎晩のように座を勤めていたのを覚えてます」(千代崎町有志座談会)

「堂々たる蔵造りと建ちならぶ店は、いづれも裕福で、店構えは偉観であった。今も盛業を続けている大きな袖蔵のあった井藤酒舗」

「北方郵便局、その前側にキリスト教伝道館、活動小屋の福集館、少し離れて実業銀行、千代崎町の境に環町交番、白シャツ腹かけ、股引姿の人力の車宿が桶屋の隣にあった。松の湯の横に細い露路があつて、突き当りにベッピンの髪結いさんがいた。大丸まげ、娘さんのももわれ、いちよう返しが自慢だった。

角店の谷口豆屋と森床という理髪店との間に、奥まつて寄席の北方亭があつた。洋服の市原と京染の丁字屋のあたりに、明治時代でも珍らしい、ちよんまげじいさんの飾りやがあつた。たらいの彦左に似た鼻めがねで金銀の細工をしていたが、腕のよい職人であつた。

本山の前あたりに、鳥屋があつて、毎年、秋から暮にかけて、キジやカモが沢山、檜の木の青葉にのせてあつた。雀や雞は東にして吊してあつた。子供が珍らしがって綺麗な羽がほしさに集まつてきていた。

正月ともなれば、山手の盛り場となる。松竹の飾りも古式ゆかしく人出の波が七草まで賑わい、普段は入りの悪い活弁映画の福集館も正月興行は満員であつた。寄席の北方亭も提灯の数を増し、

明るく打水までして、歯切れのよい声で客を集めていた」(前掲『山手物語』)

「福集館は今のお菓子屋木むら屋さんの隣り、上野町二丁目一番地あたりにあり、明治の終りから大正初期は旅廻りの芝居がよくかかりました。白井お梅もその一人ですね。出し物は浜町河岸でした。お梅はすごくいい女でしたね。それと当時一流の木村友衛なども来ました。北方亭では浪花節をやっていました」(千代崎町有志座談会)

「少しは離れた千代崎町にも震災前は道に沿って店がずうっとあって、電車道を渡って大神宮様の両脇まで店が並んでいました。山中さんという医者さんがいて、医者の方に銀行やせんべい屋もありましたね。今のフードセンターの所、千代崎町二丁目一番地には、山手きっての大きなそば屋萬盛庵(ばんせいあん)がありましたけれどそこは有名で、大きな宴会にはしょっちゅう使われていました。皇大神宮の縁日がありましたね。そのときなんか、すごくにぎやかでしたね」(千代崎町二丁目有志座談会)

●芝居小屋と三業——「芝居小屋の松島座もできました。いまの千代崎町二丁目四一のところですが、ここは松島さんという人が踊りの師匠で、お金がたくさんあったもんですから、そこに造ったんです。上演したものは主に芝居でしたが、浪曲がかかることもあって、鼈(べつ)甲(こう)齋(さい)虎(こ)丸(まる)や木村若衛も来ました。芝居がかかる前には、顔見世に役者が口上して歩くんですね。その姿は大い股旅

姿でした。客は本牧方面からも来ました。そりゃ、はやりましたね。入場料は五銭くらいでしたかな。見物の席のまん中にはうすべり、両側がさじき、火鉢や座ぶとんが置いてあるんです」(第四北部有志座談会)

こうして、この地域の町なかには、福集館・北方亭・そして松島座と、活動写真や寄席があり、有名芸能人の出演もあったという。そして、ここへは本牧方面の人々もおおぜい遊びにきたという。

この地域がにぎわうとともに、三業組合が結成された。いまの千代崎町三丁目には、料亭一駒・一力・和泉・富士屋ホテルなどがあり、芸妓置屋や検番があった。

「いまも、富士屋ホテル(震災後は小港町に移る)の門柱が個人の住宅の門として残ってますが、それが唯一、当時のものです。そこやまわりの待合などには、人力車でよくお客が来たもんです。ビール会社関係が多かったんですが、外人もかなり来てましたね。それに根岸の競馬場帰りですが、もともとこの人は大穴をあてた人で、もうかっただけですぐ待合に来る。

芸者も相応いたらしいんですが、すぐその置屋からでも、必ず人力車で来るんです。子ども心にすごいもんだなって思ってた。

そして芸者の車のあとから、当番のおじさんがトコトコかけてくるんです……いや、昔はにぎやかな所でしたね」(同座談会)



三代目虎丸の名が残っている——野毛不動境内の残欠、横に倒れたままになっている。

ビール会社が地場産業として定着するとともに、その周辺は繁栄していった。

だが少しはなれた、泉（現、北方町一・二丁目）は、まんまんと水をたえた水田のわき、山の根の道沿いに農家がつづき、少しばかりの田の間には岩沢工場、金魚池という相変わらずの農村地帯であった。千代崎川がその南側に流れ、フナやメダカが泳いでいた。

●震災の被害―震災前のこの地区の戸数は上野町で九〇〇戸、千代崎町一〇戸、竹ノ花で六〇〇戸、泉で四五〇戸、それに西之谷で八〇〇戸、小湊は商店・漁家三六〇余戸、ほかにチャブ屋十数戸、あわせて約三、二三〇戸ほどであった。

この地区の震災の被害は大きく、一、八一〇戸が全焼、西之谷では半壊または大破が四〇〇戸、小湊は八〇パーセントの全半壊となった。一、五〇〇戸を焼いた上野町や千代崎町方面で残ったのは、妙香寺の丘、豚山の数十戸だけであった。

被害をうけた建物の主なものは、千代崎町の辛酉銀行支店、竹ノ花の北方小学校であったが、最大のもはキリンビール会社であった。この頃八、〇〇〇坪の敷地のなかに工場があったが、激震によって、すべて倒壊焼失して、職工・事務員二六人が死亡した。高い塔のような乾燥室だけが鉄筋のために倒壊を免れたが、内部はすべて焼失してしまった。

ほかに妙香寺の大黒堂、北方皇大神宮の社務所・神楽殿などが



ビール会社の被害―ここも壊滅した（村上盛一氏提供）



震災直後の野外授業——帯の焼け跡で、前方は山手の丘〈村上盛一氏提供〉

焼けた。がけ地もところどころくずれ、上野町ではがけ下の四戸建て一棟がうまり、八人が生きうめとなった。

西之谷では、二四〇余戸を焼いたが、青年団総出で下水を汲み出し、千代崎町方向からの延焼を防ぎ、市電通りの二四〇余戸を焼いたに留めたのであった。死者は地域内で一一五人、関内方面に出勤中の者四〇余人であったという。

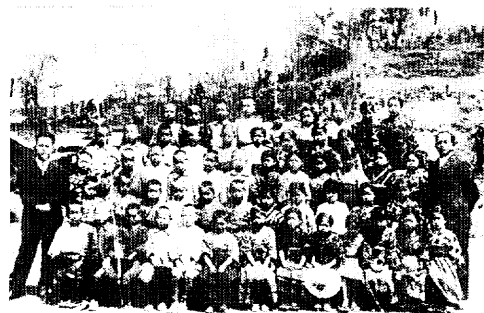
罹災者は妙香寺の山、隣接の山手公園に集まり、さらに西之谷では一時四千人にのぼった。これらの人々は仮小屋を作ったり、焼け残った家屋に寄寓した。傾いたが焼けなかった善行寺には多い時は五〇〇人、妙香寺にも多数の避難民が収容された。そして丘には、こもや板ぎれで掘立小屋を作って住む人々もいたが、妙香寺の豚山では、墓地の卒塔婆を材料にして小屋を建てる人もいて、奇観であった。

衛生組合員や青年団は応急救護のために熱心に働き、寺の住職もこのほかに死者の埋葬・供養に努めたのであった。

第二節●震災のあとに

(1) ビール風呂

●赤い煉瓦——関東大震災直後、埋め立てで出来上ったばかりの新山下町は、山下町や山手方面からの人々の絶好な避難地となり、



みんなそろって——北方小学校の学童
(大正十三年) 〈小川平治氏提供〉

一時数万人が避難したのであった。なかには高潮を恐れてここから移転する人もあったが、震災の翌日の夕方、横須賀から派遣された駆逐艦の乗員が上陸、救援活動の根拠地としたのであった。
 一〇数隻の船が往来し、救護物資を陸揚げしたり、関西方面へ避難民を送ったのである。

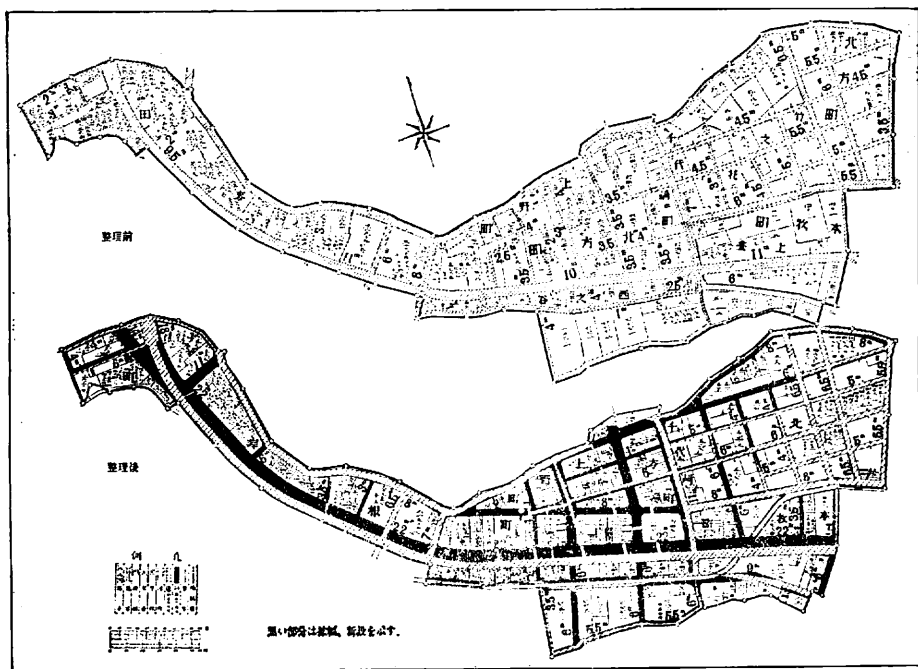
キリンビール会社が焼失したことで、会社のまわりの町も、いくつかのエピソードを残して、うたかたのように消えた。

「キリンビール会社も震災で焼けてしまったんですが、震災の時、水がないのでビールを水代りに飲みましたね。水代りのビールなんぞ今では結構なことですが、当時は必死でした。新桜道のところがビール置場でしたが、そこへもバケツを持ってビールをもらいに行きました」(千代崎町有志座談会)

「ビールのタンクからどくどくとビールが流れて来まして、ピヤダケの坂を流れてくるんです。それを、バケツですくって飲みました。それに、ビールをドラム缶に入れて、風呂を沸しました。ビール風呂です。あとにも先きにも、こんなにビールを飲んでめしの代りにしたり、風呂にしたことはなかったなあー」(同座談会)

震災後のビール会社の意外なプレゼントであった。
 「貯蔵槽に残ったビールは、そのとき市会議長で当時の監査役平沼亮三氏のすすめで、市民に配給して大いに喜ばれました」(麒麟麦酒株式会社五十年史)

震災後、キリンビールの工場をわれわれ地元では、新山下町の



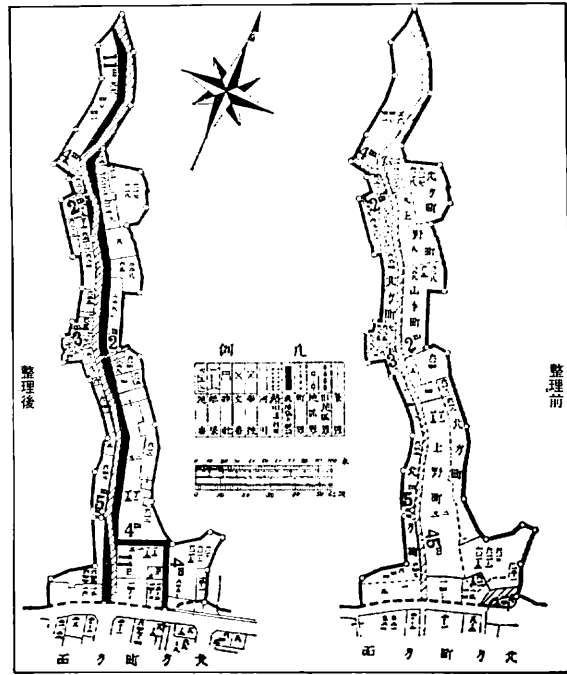
第12地区区画整理図——下の図で黒い部分が、新設、拡張された部分を示す



排水溝——レンガが並べられて、今も使われている(千代崎町四丁目所見)

埋め立て地に新しく作ろうと運動しましたが、新山下町側の反対にあい駄目になってしまいました。住宅建設が先だったんですね。横浜市の計画でしたから」（第四北部有志座談会）と地元の人はいう。

いまビール会社があったことが知られるのは、千代崎町一丁目の麒麟園公園内の「麒麟麦酒開源記念碑」と、北方小学校内の「ビール井戸」だが、千代崎町一丁目二五番地辺りは、ビール会社の南門の跡で、地中から赤い煉瓦が今でも発掘されることがあ



第12地区区画整理図追加分

るといふ。

震災の復興は、政府の方策、横浜の官民の努力、国内外の救援によって進められたが、この地区は本牧や根岸と同じように、罹災者の受け入れ地となった。

●区画整理——震災復興の一環として、県は大正十四年（一九二五）、政府からの交付金と木材で罹災者の住宅対策を行い、市内一カ所一〇〇戸の応急住宅を建設したが（のちに市に管理を移管）、天沼には三棟一六戸、延一一七坪（三八六・七平方メートル）が建設されて、小部分ながら、応急対策土地として利用されたのであった。

そして、この地区に震災復興計画として、土地区画整理が行われた。区画整理は第一二地区に指定され、大正十三年二月の現況調査に始まり、昭和三年（一九二八）三月、換地告示を行ったのである。区画整理は、北方町字竹ノ花、上野、西之谷、上野町、千代崎町の各一部と、麦田町の各一部に施行された。表通りの主要地方道高島本牧線では、従来の九・五メートルから一メートルであったものが二メートルにひろげられ、一メートルの道路（従来の表通りの幅と同じ）が四本、わき道に新設されるなど、この地区にとっては画期的なことであった。面積四万九、五四八・〇五坪（一六・三七ヘクタール）、移転棟数一、二三一棟であった。この区画整理によって町並みは大きく変った。「区画整理前、上野町の道路は、荷車がやっとすれ違ふことが出来た細い道でし

た。路地がたくさんあり、家が建て込んでいましたが、震災後の区画整理により、道路幅が広がり、宅地が街路に面するようになつて、住みよい町になりました。それに人情豊かで本当に住みよい町です」と、この町で生れ育った人はいう。新しい町づくりとして行われた市の区画整理とともに、この復興に協力したのは当然ながら地主であった。

「千代崎町や上野町を区画整理し、碁盤の目のようにしようと委員会が作られました。山中敏恭、上條治、箕輪半蔵さんたちが活躍しましたが、代替地の問題やら何やらで約一年はかかりました。しかし千代崎町は、いまの四丁目の途中で区画整理が止まってしまった。区画整理をした後で、三、四丁目ができました」
 (千代崎老人会座談会)

「箕輪半蔵さんは地元のためにいろいろやってくれた人でした。市会、県会議員をしたりしていました。名主の家柄であったと言います。大金持の箕輪さんの屋敷は今の団地の所がありました。地所は本牧一丁目から四丁目まで七十町歩も持っていたそうです。震災直後の大正十三、四年頃、息子の霧之助さんが外国から呼びもどされ、四丁目は白費で区画を整理しました。レンガを並べた排水溝が今でも残っています」(同座談会)

現在の千代崎町四丁目九九番地あたりの側溝は、当時の状況をわずかにしのばせてくれる。

箕輪家は代々この地区の開発に尽力した家柄で、半蔵の父の箕

輪三郎は久良岐郡長を務めた。

上野町や千代崎町のきっちりとした区画された一帯は、住宅が建ち並んで、震災前とは比較にならない住宅地となった。そこには商店が並んだ。こうした状況は、昭和戦前にまでつづいていくが、整然とした区画の町にはなかったものの、ビール会社とともに繁盛した町並み、それに寄席も消え、昭和六年には北方見番も廃止となって、竹ノ花三業組合も解散した。かつての賑いは泡のように消えたのであった。

●公設質舗——そして、この地区の泉には公設の質舗が設けられた。この趣旨は、震災によって当時の庶民金融であった質店もほとんど焼失してしまい、「罹災者の金融一時全く絶えたる有様に、市民の困窮甚しきものあり」(横浜市『横浜市社会事業概要』大正十四・十二・二十二)であったので、市は応急対策の仮質舗について大正十三年に浅間町、西戸部(現、西区)に、十四年には青木町(現、神奈川区)、北方にはその年の三月二十六日に設置した。次いで七月には山下町、翌十五年五月には富士見町にそれぞれ新設された。

北方質舗の建物(現、北方老人憩の家)は二四坪(七九・三平方メートル)、建設費は九、〇四七円であった。経営は、運転資金四万円、質物の鑑定人、事務員それぞれ一人によって行われた。貸出金は一口、二〇円が最高であった。

●草原に——震災直前に埋め立てを終わったばかりの新山下町



市営北方質舗



新山下に建てられた応急住宅（昭和8年）——がけのすそに屋根が光っている〈関口フミ氏提供〉

は、ヨシが茂り、道路さえ区別のつかない草原がつづき、釣り船屋が二、三軒あった程度であったが、震災に際しては、元町あたりの被災者がぼつぼつバラックを建てていたのである。この広い空地は、被災者のために都合のよい収容地となった。十五年（一九二六）十月、五棟の応急住宅が建てられた。町の人はいう。

「住宅は四〇戸ぐらいだったと思います。六畳と三畳で、家賃は月六四五〇銭だったとおぼえています」（新山下有志座談会）

後に、この応急住宅はとりこわれ、新たにアパート二八〇戸ほどが建てられた。当時としてはモダンな造りであった。

「表通りは、一階が店舗で二階は住宅ですが、一、二階で家賃七円二〇銭、下だけで六円五〇銭、二階だけですと三円八〇銭でした。この建物の材料は、アメリカからの救援資材だと聞いています。内部の壁は全部ヨシズにしつくいを塗ってあります。その建物は今でも残っています。」

柴田さんという人が管理人で、家賃の完納組合をつくるようにすすめてくれました。一年分の家賃を前納すると一カ月分は戻ってくる仕組みでした。六、七組ありまして、会員は一〇人か一五人ぐらいでした」（同座談会）

結局、新山下町は、港湾関係施設の用地として造成した土地に、被災者収容の住宅を造り、街並みが形成されていったのだが、人の住む所としては何かと不便であった。

「その頃は雨でも降ろうものなら、道はすぐ泥道になってしま

い、ツルツルすべるんです。大雨という山手の山がくずれて死
人が出たこともありましたが、玄関まで泥が入って困ってしま
いました。そういうことがあっても、国や県はあまり面倒を見て
くれませんでした」(同座談会)

「私は昭和元年に生まれて、印象に残っているのは、二、三年し
てから、トラック道路の舗装工事が始められたんです。その時の
工事が朝から晩まで続いて、うるさくて困ったことでした」(同
座談会)

「三丁目あたりの埋立は昭和六年からで、完成したのは九年十一
月でした。そしてすぐ十二月一日には、横浜木材倉庫が営業をは
じめています」(同座談会)

●見晴トンネル―こうした土地に次第に家が建てられ町並みが
形成されていくに従って、山下橋から小港橋への幹線道路のほか
に、本牧方面との連絡道路が必要となり、はじめに山手の丘を貫
通する見晴トンネルが掘削されることになった。昭和七年八月完
工したが、これによって、新山下から直接に千代崎町や本牧方面
へ往来ができ、買物なども上台公設市場をはじめ、付近の商店へ
と足をのびることができるようになって、市民の日常生活に利便
をもたらすことになった。

「トンネル工事は、市のはじめての失業対策事業で、工事人一日
の賃金は一円五〇銭でしたが、当時の人々はよくやりましたね。
トンネルが出来てみると、町の人々はここを通って本牧に買い出

しに行ってしまう、新山下町の店は、かえってさびれてしま
した。何しろ、一束一〇銭のなっぱが上台へゆけば六銭位で買
えるんですもの。昭和七、八年のことです」(新山下町有志座談会
さらに、この地区と山手の丘とを結ぶ坂、千鳥坂の開削にか
った。これには地元青年団の努力によるところが多かった。

「今の千鳥坂は、青年団が一月以上かかって、作ったんです。
十銭のラーメンを一杯ずつもらって、毎日のように夜の八時すぎ
まで工事をしたんです」(同座談会)

●新山下の変化―昭和初期は、まさに、新山下町発展の始期で
あった。直線で、新山下運河が掘削され、そこには霞橋、新開
橋、見晴橋、鬮橋（カサガハシ）の四つの橋がかけられた。昭和八年(一九三三)
十二月には広い保管堀を持つ市営貯木場も完成した。

いわゆる戦前の新山下は、海苔養殖の盛んな本牧の隣接地で、
木材豊富な貯木場を中心として、その周辺には、製材・材木商が
進出し、この地域の特色をなしていたが、次第に住宅が建ち町並
みひとつの交通が便利となるにつれ、倉庫をはじめとする港湾
関連の施設も増加して、横浜港の外周部の一画としてその特色が
鮮明となつていったのであった。

●バンドホテル―こうしたなかで、いち早く企業として進出
したものにバンドホテルがあり、埋立地域の建物の草分けの一つ
となつた。

このホテルの前身は、山下町にあったクラブホテルで、いくた



見晴トンネル―北方口、トンネル
の向うは元町の代官坂

の変遷のうちに、昭和四年、現在の位置にドイツ人がクラブホテルを継承する形で計画、昭和七年に完成した。しかし、資金難によって、他の人の手に渡り、昭和十七年には斎藤竹松（弁護士）が譲り受け、現在のバンドホテルの基を築いたのであった。

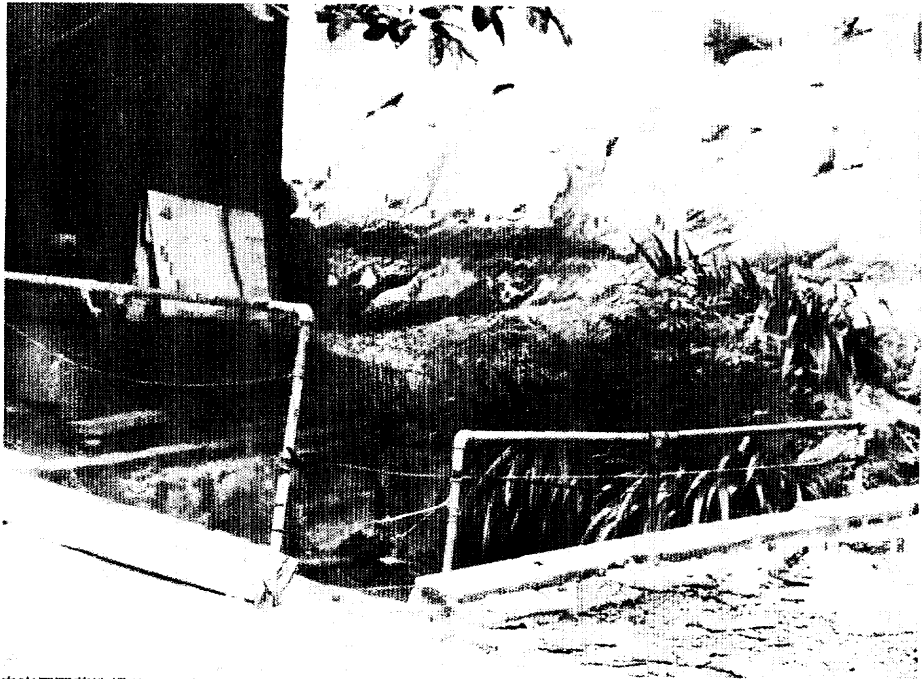
このバンドホテルも横浜らしく国際的で、昭和五年三月一日には、九カ国四一組が参加して、国際ダンス競技会が開催されたこともあり、戦中は引揚外人の一時宿舎、同盟国のドイツ人の宿舎になり、戦後は、接収されるなどの変遷を経た。

震災復興にともない、新山下町が急激な変化をみせても、この地区のおおかたの町は、倒壊した建物が再建されたほかは、震災前とさしたる変化は見せなかつた。

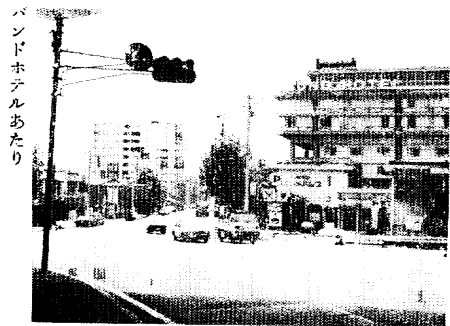
●野菜の洗い場——西之谷の場合は、一帯が畑地で、農業最盛期の名残りとして、農作物の洗い場が昭和初期まで残っていた。ここで洗われた野菜は、上台方面や港町方面の青物市場へ出荷された。

共同洗い場で農家の主婦が三々五々、ねえさんかぶり、カスリのモンペで、世間話に花を咲かせながら野菜を洗う姿は、健康そのものであった。昭和初期には、こうした姿がどこでも見られたものであり、それが小川のせせらぎであったり、川の寄り洲であったりしたが、西之谷の場合は共同利用で、コンクリートでつくられた大きな井げたの清水が利用された。

皇大神宮を起点として店と住宅がかたまっていた。恐らく、天



自家用野菜洗場跡——清水の湧くがけの下にあった、今はほとんど使われていない（西之谷町所見）



バンドホテルあたり

沼のビール会社繁栄の影響であったかもしれない。そこには、料亭や見番、待合があって、小規模ながら三業地でもあった。それに、酒屋、八百屋、米屋、葉屋などの店、さらに石屋、風呂屋などがあつた。

●善行寺―善行寺の下を通る道が、本牧緑ヶ丘に向うメイン道路であるが、これは悪路であつた。善行寺あたりから坂は更に南にのびていくが、谷間になっているこの路は、豪雨の時には排水路になって、上からの水や砂、石ころなどが流れ、ちょうど、道全体が河原のようになって、付近は池のような水たまりとなり、さんたんたる有り様になつたという。

「この道をはさんで両側の丘陵地には雑木林があり、傾斜面には花畑が続ぎ、そのなかには麦や野菜が栽培されてきました」

「八木牧場には乳牛が数十頭放牧されていて、とてもどかな風景でした。普段は人っ子一人通らない静かな谷間でした。道の向う側『サポテン京楽園』へは、東京近辺からも、かなりの人が来ていました。この町の中心はなんといっても善行寺でした。境内と墓地が広く、寺のまわりには、茶屋を兼ねてお線香屋があり、手広く農業をやっていた大草ぶきの農家もありました。農家は、上野町や本郷町へ新鮮な野菜を出しておりました。なかでも、自然薯じゆんじゆは、土地が良いのか、すごくおいしくて好評でした」(第三地区有志座談会)

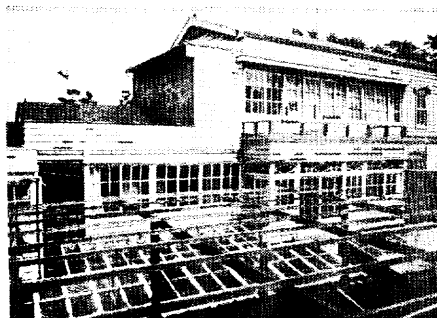
「西之谷と本牧二丁目の境の部分は、ここも静かな住宅地でした。

た。朝夕は豆腐屋のラッパが聞こえたり、いろんな行商の人が天びんをかついで出入していました。また、夕暮れともなると、待合には生糸問屋の旦那衆とか、組の若い衆などが集まってきたて活気がでてきました。番小屋には老人夫婦がいて、おじいさんは提灯を腰に下げて毎晩拍子木を叩いて火のヨージンです。私ども子供はこの拍子木が鳴ると、きまつて寝る時刻でした」(同座談会)

西之谷の善行寺は慶長元年(一五九六)、日随上人が妙香寺からここにうつり、開山された。『横浜市史稿・社寺編』この寺には、文久元年(一八六一)、イラストレイテッド・ロンドン・ニュースの挿絵通信員として来日、日本洋画の多士済々の弟子を教え、ポンチ画の先駆者、チャールズ・ワークマンの妻、小沢カネの墓がある。

●京楽園―京楽園は、大正の末から昭和六、七年頃が最盛期だった。おりからのシャポテン愛好ブームに乗っていた。シャポテンの原種を海外から輸入し栽培したものを手広く通信販売した。外国からの郵便物も横浜市京楽園で事たり、一時、郵便料は日本郵船に次ぐ額にのぼったと言う。全国的な販売であつたので、各地の新聞には半ページ、あるいは一ページの広告を行っている。昭和七年、おりからの地域開発にのって、かねてから東海道沿線に土地を物色していた京楽園は、藤沢市の辻堂の三、〇〇〇坪の土地へ移転することになった。東海道沿線は、いながらにして広告の効果を果すことに着目してのことであつた。西之谷には親族

京楽園

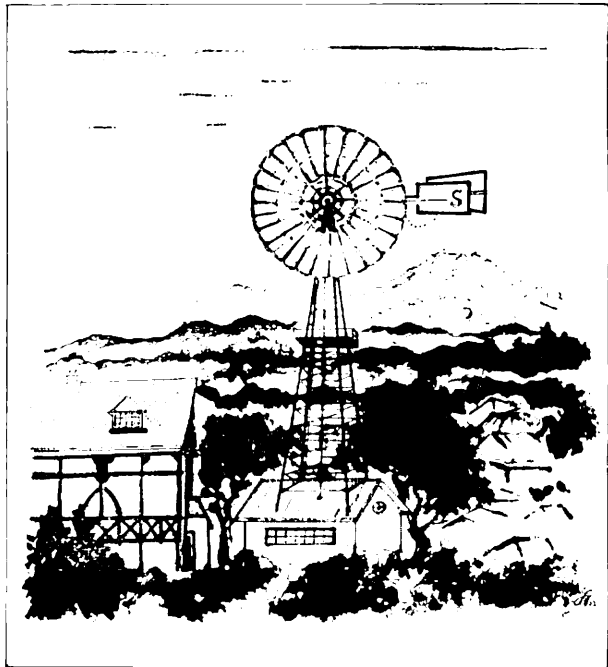


の片桐八郎が分園ということで残ったが、昭和十八年、戦中、この種の産業は廃業せざるを得なくなってしまった。西之谷では地場産業としての芽も出なかった。

●風車——丘の向い側は通称大神宮山といわれ、北方の皇大神宮南側には、外国人がかなり住んでいた。

緑ヶ丘へのびるメイン通りの両側は桜の並木で、春ともなれば美しい桜のトンネルになった。桜並木が尽きて小高い緑の丘、そこにはおよそ二〇数メートルもあるドイツ人の風車がひときわ高く建てられていて震災で倒壊するまで土地の名物であった。

「山の手からもよく見えたドイツ風の風車。緑に彩られた丘陵の小高い丘に、風車小屋の屋根から伸びた鉄塔の尖頭に、大きな黄色の風車の羽根がゆるやかに廻転しながら、朝日にキラキラ光っていた。風車小屋のある山を、土地の人々は大神宮山といった。急勾配になった坂道を登りつめたところに風車があった。風車のある洋館は緑のペンキの二階家で、格調高いものであった。シフトナと言うドイツ人の邸宅で、入口には桜の木もあったが、カシヤシイの大木が屋敷をとりまき、森のように見えた。屋敷の傍には、みかんの木や、お花畑もあって、野菜も作っていた。鶏が群れ遊び、斜面の山羊小屋は崖地を巧みに利用して、ドイツ人らしい試みであった。風車小屋の中仕掛は、井戸水を汲み上げる機械や、工作器具があり、風力利用の小工場で、中でも自家発電は魅力だった。この風車の鉄塔に登った事があるが、芽ぶき時であっ



大神宮山の風車〈藤村久直氏画〉

たので、深呼吸すると、胸の奥が緑に染りそうな気持ちになる。空気はそんなにもうまいものであった。

風車小屋の前は削り取られたような崖で、下は目が廻って見れなかった。上野町や麦田の町が川原のように、家並が砂利のように小さく見えた。緑の深い丘陵の光に、白く富士山が浮き出て、実に爽快な展望であった。先の一次大戦中、この風車小屋に、発電機と無線装置があるということから、この家の主人シフト

「ナはスパイ容疑を受けたが、そんな事はなかったそうである」

(藤村久直『山手物語』)

これは横浜らしい、異国的な景観であった。この頃、この自家発電は、地元の人々にとっては、魅力と羨望的であったといふ。

風車小屋は震災で倒壊、しばらく残骸をさらした後、いつとはなくかたづけられ、この横浜らしい風景は再現されることはなかった。

●天沼——一方、対面の山手の丘下の天沼は、キリンビールのなくなつたあと、静かなたずまいの町になつていた。その街並みは、外人屋敷が東西の丘にあり、その谷間に中央の道が走り、いくつかの小路があつた。北側の道は「調練場みち」と呼ばれていて、山手のイギリス(赤隊)の駐屯地の名残りで見られるが、いまは道はなくなり宅地である。北方小学校から山手への坂はちぢやの坂といわれていた。中央の道がメインで、山手の通り、ワシン坂の上に出た。

この狭くて小さな町に、文具、パン店、薪炭屋、たばこ屋、八百屋、畳屋、運送店、人力車屋、酒屋、大工、牛乳店、ガラス屋、雑貨屋、菓子屋、床屋、それに洋服屋、スカート屋、湯屋、請負師などさまざまな職種があつたが、この町域が早くからひらけた名残りであつた。今この区域には、パン、文具、クリーニンク、食料品店がそれぞれ一店あるだけで、その外はすべて住宅で

ある。

この住宅のなかの浴場には、山手の外人住宅のアマ、コックたちがよく入浴に来たという。

それぞれの地域は町並みがととのい、昭和八年四月一日、宇西之谷は西之谷町、宇小湊は小港町、十一年十一月一日には妙香寺台が新設された。それぞれは町として独立してゆき、落ちついた雰囲気の町となつたが、小港や新山下は、港灣の外周部として、北方地区の落ちついた旧状とはうらはらに、時代の波のなかで変化の時期をむかえていた。

(2) 小港の海とチャブ屋

●チャブ屋——震災後の北方は、多かれ少なかれ、時代の波のうねりのなかにあつた。それはさまざまに見られたが、なかでも小港町のチャブ屋は、チャブ屋街として指定された大正のはじめ以来、外国人相手に営業をつづけてきた。

大正期のチャブ屋は盛んであつたようである、その一端は次のように記されている。

「何と云つても其の本場は、本牧のチャブ屋である。本牧、十二天、小湊、宮原、上臺にかけて、ホテルやバーやテーハウスが、四十軒近くも散在して居る。……」

小湊の電車停留場前には、各ホテルの案内図が出て居て、喜代は何処、大黒は何処と判り易い道しるべを、何人も敢て不思議と



チャブ屋街（昭和初期）〈村上盛一氏提供〉

しないほど、本牧のチャブ屋だけは、天下御免の大ビラに、植民地的の色香のシーンを、次々に展開して居るのである。……

チャブ屋に見る情趣は、何となく日本放れがして居て、如何にも「港の横浜」と云ふ感じがした。

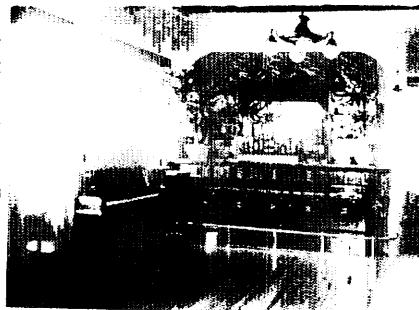
狭い六畳の洋室でも、窓を開けば白や赤の点火が点々として海近い夜風さへ、「相思草」の舞台面を聯想させた。真にモダンガールと云ふべきであらう」（松崎天民『明治大正実話全集・裏面暗面実話』）

昭和に入ってからますます盛んであった。来客も外国人に加えて、キヨホテルほか二店以外は、京浜の会社員や給与生活者も客としてむかえた。

彼女らはダンサーとしての技倆はもとより、なかには女学校を出たものもいて、ひと通りの知識をもつて当時のモダンボーイらに接し、外国人とは英語でつき合うことができた。ロシア革命直後には、帝政派の若い外国婦人もここで働いた。そこには、ミナト町横浜ならではの雰囲気もただよわせていたのであった。

客種も多様になったこの頃から、簡易ホテルにバー、キャバレー、喫茶店（ミルクホール）、酒場などをミックスしたような営業形態をとりはじめていた。そのサービスのための女性達は、外国人の相手をするためモダンであった。いわばモダンガールの発祥ともいわれた。

作家・大佛次郎は昭和初期のチャブ屋のたたずまいについて、



チャブ屋の内部（昭和初期）——ホール、ピアノがありカウンターの奥には洋酒が並んでいる。夜ともなればシャンデリヤが輝き、ホールいっぱいになる。

次のように語っている。

「この社会には非常に古風なものがあってね。建物自体は洋館というモダンなもののだが、この中に神棚があり、古めかしい仏壇が飾ってあるという具合で、実にちぐはぐな感じがしたものですよ。日本髪姿の女の子が片言で英語を話すといった当時だったからね」(大佛次郎「霧笛を生んだ波止場」『横浜今昔』所収)

昭和初期のチャブ屋街には、キヨホテルとカノホテルが本牧町四丁目の海の近くにあったほかは、小港町三丁目にかたまっていた。そこにはいわば検番の仕事兼ねた山手旅館組合事務所があった。組合の事務が行われていた。

「チャブ屋は遊廓とは違います。部屋代とか食費は自前でしたから、彼女らは夜の営業時間以外は、いつでも出かけようとまったく自由の身でした。伊勢佐木町に散歩に行くもの、銀座に買物に行くもの、日本橋のユニオンというダンス・ホールに顔を出すことだってありましたよ。

チャブ屋には、酒場さんというマネージャーといった格の人がいて、店の経営をとり仕切っていました。この人がお客と交渉しましたが、英語が判る人で、外国人でも平気でした。年輩の人が多かったですよ」(野毛町 吉田衛氏談)

この女性たちについて、昭和初期からチャブ屋を経営した人は、「保護者の認めた書類をとって、身元の確実な者だけを使用しました。朝食は十時、昼食は午後一時、夜は六時にお風呂に入り

ます。その前にごはんをきちんと済ましています。規則正しい生活はチャブ屋の特徴なんです。ひと頃は判事さんや警察の方も来られましたね。昭和の初め頃はまあよき時代だったんでしょうね。

芸事は必要ありませんで、普通愉快にさわりだりしていたものですから、ハイカラに見えました。二十歳前後の女性が多く、大体はいい人たちが多かったです」と語っている。

「チャブ屋のなかに、メリケンお浜という有名な女性がいた。私の父が第二キヨに牛乳を納めていた関係から、お浜さんは父に、何んでも頼んでいました。お浜さんは浜ッ子でした。大柄で美しい人でした。全身にお白粉をぬって、香水風呂に入っていると、つばらの評判で、大層稼いで、どんどんとお金を使ったものです」(第四北部有志座談会)

「お浜さんの出す洗濯物だけでも、クリーニング屋一軒の商売がなりたつたといえます」(同座談会)

「私はお浜さんと懇意にしていました。直接聞いた話ですが、ツエペリンの飛行船が来たとき、その乗組員がお浜さんに惚れて、帰るのがイヤだと、格納庫にかくれてしまい、予定より遅れて帰ったということ、よほどお浜さんがよかったですね。しょうね。メリケンお浜って外国まで知られたんです。戦後の昭和二十年代、弥生町の自分で経営したバーで亡くなりました。

この人のことについては、小堺昭三の小説『メリケンお浜の一

生」ほかに書かれていますね」(酒亭 上総屋常連座談会)

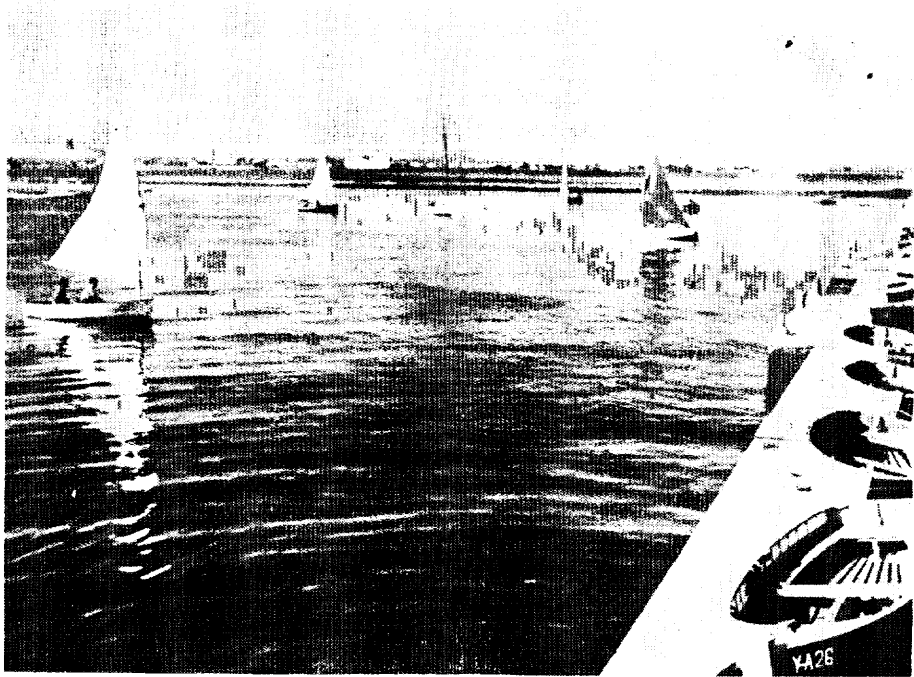
チャブ屋の想い出を語って、町の人はいう

「たしかに値段は普通よりも高いことは高かったのですが、サービスがよいということだけで、十分に値打ちがありました。ダンスは一晩中やっていますね。客がきまるまでは席料はなく、ダンスのチケット代もとられませんでした。酒類は日本酒、洋酒なんでもござれ、コーヒーマも何んだってありましたが、とにかく多くお金を持つてゆけば、十分ゆっくり遊べたんです」(同座談会)

こうした状態は、昭和十二年、日中戦争が勃発し、日本中が戦時体制に入っても全体的に変ることなく、ここでは自由にダンスが踊れ、高値ではあるが飲食自在であった。この頃ダンスホールは、時局柄として肅正のひとつにあげられていたので、ホールからシャットアウトされて困りぬいた有閑マダムが、客としてのチャブ屋街に流出することになった。

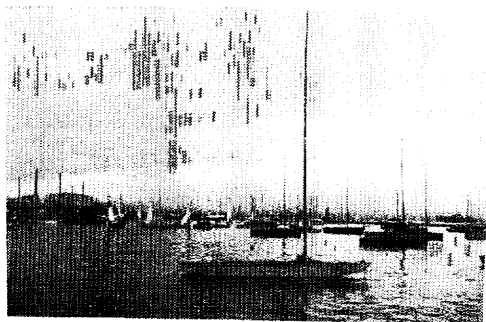
ホールが駄目ならチャブ屋でとばかりおしかけたもので、最初のうちはチャブ屋でも景気がよくていと歓迎していたが、遂にこれらの有閑婦人達は警察によつて検挙され、戒告をうけてしまった。こうしたことも、ひしひしと戦時色は迫っていたのであった。

◎ヨットハーバー——昭和十二年(一九三七)一月十六日、オリンピック東京大会組織委員会の一行は、来るべきオリンピック東



ヨットハーバー風景——戦前

戦後のヨットハーバーへ武井富夫氏提
示



京大会のヨット競技の予定地として、新山下町の海岸を視察した。これにたいして市会や参事会は、東京市と懇談をし、その後数多くの折衝を経て、十三年二月八日、ヨット競技誘致に成功。

十四年一月三十一日に社会大衆党横浜市議団は、「時局柄」を理由に、市に対して建設延期の申し入れをした。しかし八月三日、予定どおりヨットハーバーの建設が着手された。海面約一万坪（三・三ヘクタール）、陸上五千坪（一・六五ヘクタール）、ヨット三百隻、工事費一五万五、〇〇〇円であった。オリンピックが中止となり使用されなかったが、当時としては、日本で唯一のヨット専門港として、全国にその名をとどろかせた。

昭和十四年（一九三九）十一月二日、明治神宮大会のヨット競技が行われ、天皇の名代として秩父宮の台臨があった。ついで十五年八月九日から十一日まで、第十一回の明治神宮体育大会海洋競技が行われた。このときは高松宮の台臨があった。

「この神宮競技以外に、ヨットの日本選手権大会、あるいはインターカレッジ大会とか、ヨット競技のほとんどがこの横浜ヨットハーバーを会場として行われ、横浜はもちろん、日本中のヨットの普及発達に偉大な貢献をしたものです」（西区老松町 千野純次氏談）

●小港埋立―新山下町がヨットハーバーとして脚光をあび、それにともない次第に市街地となっていくにつれて、小港の海岸もいよいよ埋立による開発が実施された。小港の海岸は、すでに新

山下町関連の用地として計画され、一部工事がされていたが、震災によって中断、昭和九年頃からいまの小港一丁目、ワシン坂寄りの山をくずして埋立が始まったが、十六年（一九四一）十月二十八日、一万、〇七四二坪（三・五五ヘクタール）の埋立が竣工した。

しかし埋立が終ったものの、新山下町のように、急激な土地利用はなされず、わずかな移住者があっただけであった。

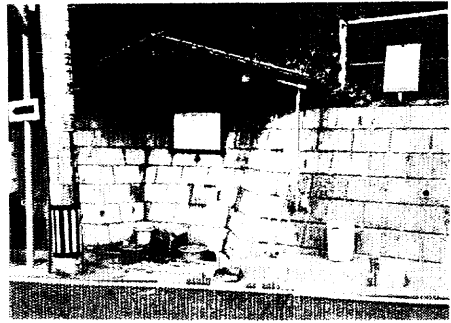
「私は伊勢佐木町から昭和十六年に小港に来ました。来たときは、このあたり家が全然ないし、さびしい所でした。あまりのさびしさに我慢出来ず、夜になると自転車で伊勢佐木町に出かけました。道路の端には、アシやヨモギが人の背くらいにおい茂っており遅くなって帰る時なんぞ恐ろしかったです」（小港町有志座談会）
●もとの小港―震災前の小港町、特にいまの一丁目あたりの海岸は景色のよい所であった。また作家谷崎潤一郎は、震災までの二年間小港と山手に住んだこともあった。

しかし海岸の近くはほとんどが湿地であった。海岸線には新山下からの一本の道があったが、少し大ぶりの波が押し寄せると、道はすぐに海水にひたった。

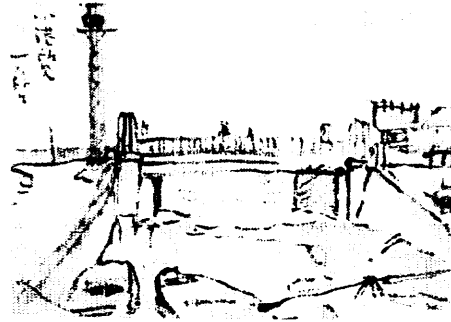
「当時はヨシの田んぼばかりで、家は五〇軒ぐらいきりなかったですね。今の一丁目五番地大橋ビルの角の所の波打際から入江になっいて、現在の小港の町のなかはドブ川のようになっていました。シケの時は船をすばやく入江に入れるんです……」

向い側には岡本造船がありました。この元祖は外国人、家は洋館でまわり廊下でした。十六歳の岡本酒造さんが、イギリスのヨット専門の技師に製造方法を学んだそうですが、以前は貯木場の所に会社があったのですが、今は江ノ島にあります」(同座談会)

「小港と言えば、大地主は佐藤さんのいぢまぎですね。横浜市長になられた人もいます。小港一丁目のおよそ半分は佐藤さんの地所でした。上の方に大きな池があり、そこから清水を二カ所本宅内と町の中へと引いていました。普通の用水でしょうか、今はありませんがね。そしてそのまわりには柿の木などがあって、子ども頃、その柿を遊びでとりにいっては、理助さんに叱られたも



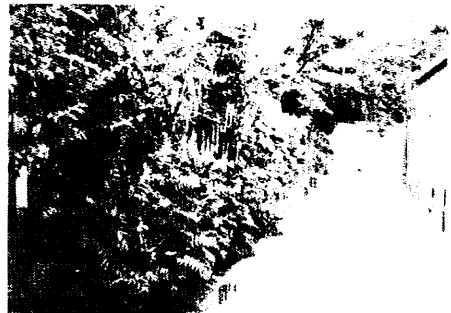
ワシン坂の泉



小港所見——千代崎川河口。(小島一谿画。『横浜百景』より)



新山下所見——小港の浜。(小島一谿画『横浜百景』より)



海浜性植物の茂る小路〈小港町一丁目所見〉

んです。

この辺には池といっても小さい水たまりが無数にあり、天気が続いても水がかわくことがあります。震災の時、この三つの清水を、トンネルからこちら側の人達が飲料水として使い、非常に助かったんです。遠くから来る人達はヤカン、バケツを持って行列が出来たほどでした」(同座談会)

山手の丘を水みちとした三つの清水も、ワシン坂下に一つが残っているだけである。

涙橋は、小さな流れに渡された幅一・八メートル、長さ一・五メートルほどの石橋であった。現在の小港町一丁目一三番地と二一番地の間の道路上にあったという。

古くから居住している小港一丁目の人びとには、海に対する追憶がひとしおである。

「小港橋のそばに一本松がありました。その土地は小高くなつていて、かつては海に面していたんですけど、夏になると多くの人が遊びにきました。少年の頃は赤フンで家からそのまま海へ行けたんです。その向側、今の中部下水処理場の辺りに、月見館という茶屋や海水浴場がありました」（同座談会）

小港橋は当時木製であったが、震災後、かけ直してコンクリートになった。現在、橋が見えず、道路の一部に見える。千代崎川の川口に、その親柱だけがひっそり立っている。

「たくさんあった佐藤さんのなかで母家（家号）の佐藤さんが商売してましたね。海水浴客相手の売店でした。カキ氷、オデンなどを売ってました」（同座談会）

小港海水浴場については、昭和十年の『中区勢要覧』に、本牧海の家、二ノ谷海水浴場、間門海水浴場とともに小港月見園として、その名声を記している。

地元の老人は、

「私は市庁舎の所で出生し、青年時代まで過している。小学生時代には、団地になっている小港海岸にはよく遊びに行った。ここは砂浜ではなく小さな入江で、岸には多くの岩礁があって、蟹や船虫がたわむれていた。沖には真帆片帆の漁船がゆきかい、岸には漁師の干す網が所せましと並べられていた。今の下水処理場付

近には、ちょっとつき出た小高い半島があって、松の古木に囲まれた十二神社が祭られてあった。南西にあるような景色で、空は青く、水は澄み、磯の香りはただよい、まことに穏やかな漁村情緒をおわせていた。

本牧まで行けば棧敷のある海水浴場はいくらもあったが、ここ小港海岸には、そうした施設はなく、漁船の影で身仕度し、赤フン一つになって、無料で泳げるのが何よりの魅力であった。ただ十二天神社のある半島の下だけは潮流の変化が激しく、常に渦を巻いていたので、近づかないことにしていた」（佐藤良之助「想いの記」『こみなと団地』所収）と語っているが、小港は海を除いては考えられない。人びとの暮しは、この海とともにあったのである。

「小港の女の人は非常によく働きました。夜中の十二時頃でも、のりを取りに行き、寒中だって海に入ったものです。海岸には舟の積荷で不用になった木片など薪もたくさん落ちていたので、ほとんど買わないですみました。この薪拾いだけは団地が出来るまで続きました。

暑い日が続くと、にがしおと言って魚が酔って浮く。アイナメ、コチ、カレイ、その他いろいろでした。親戚に分けてあげたりしました。戸部の方に、むきみを売りに行ったこともあります。ほんとうによい魚がとれたものです。これが戦後の食糧難の時、大助かりでした。のり、あさりのつくだ煮、あさりの目刺し

を持って買い出しに行き、珍しいものを持って来たと言って、農家ではいいものと交換してくれました。青やぎ（ばか貝）は風が吹くと十二天の下あたりであき袋一杯、楽にとれました。この辺の人は、あさはらはただで食べるものだとぼっかり思っていました。あさはらは簡単にとれるんです。砂のところ穴があいているので、そこを掘るとたくさんとれるので、メグシと言って笹のくきにあさを通しました。あさりの目刺しですね。私は皆から、あさりの名人と言われていましたよ」

「それから桃の種子が浜の一面に落ちていて、それを拾って来ました。燃料として使うのです。大変火力が強くてね。バケツ一杯ぐらいわけなく拾えました。外国船が捨てたものが、潮の流れで浜についたんですね。とにかく団地が出来るまでいろいろなものがとれたのです」

「海に行くと、薪、炭、石炭なんでも拾えました。船の燃料は石炭です。その燃えがらをすけると、それが波打ちぎわに来る。そのコークスをかわかして使います。一航海にいくらと石炭など決められているので、残すと次に出港する時にもらえないので港にすてたというんですから、こっちは助かっちゃあ……」

「この町の人が長寿なのは海に恵まれていたからです。風が吹けばあさが寄ってくる。あさは背負うほどとれました。のり、わかめ、なまこなど、ちよつと風が吹くとみなは朝早く浜辺へ出かけてひろったもんです」（以上、小港町有志座談会）

とにかく、小港の浜は当時の人びと、特に婦人達にとって、小づかいくらいはすぐ稼ぎ出せたとし、簡単に家族の食せんにのせられる海の幸を得ることができた。当時、家庭にあった婦人達は、よく働いたものだ、と地元の人びとは賞賛する。いまではかつての海の名残りは、路地に自生する海浜性植物くらいのものである。

(3) 海軍倉庫

●軍需工場——しかしこうした状況もわずかで、新開地小港も戦時下にあつて、ただちに軍時のために利用された。昭和十六年（一九四一）四月、日本鋼管浅野船渠本牧分工場が建てられた。さらにその敷地の一角には、少年鑑別所も設けられていた。当時本牧分工場の徴用工だった人は、つぎのように語る。

「今の小港団地のある所には、戦争中、日本鋼管の軍需工場がありました。今のように、そんなに広い敷地ではありませんでしたが、三〇〇坪ぐらいの機械工場が二棟、それに仕上げ、組立て、ケビキと言われた製図、火作りと言われた鍛冶、木型の各工場、それに倉庫、事務所、食堂、変電所がありました。そこでは船のウインチのほか、船舶関係一切の物を作っていました。

工員は二〇〇人ぐらいだったと思いますが、三分の二以上は徴用工でした。少年鑑別所の宿舎は、木造の平家で、二〇〇坪位（六六〇平方メートル）、ただ泊るだけの施設のようでした。朝、こ

これからどこかへ行って作業をしていたようです。徴用工は朝八時から五時までの勤務で、給料は超過勤務手当を加えて四三四円でした。私は素人でしたが変電所に回されたんです。今考えるところわい話ですが……」(南区井土ヶ谷上町 野間光明氏談)

小港に軍需工場ができれば、当然のようにヨット競技は下火となった。下火となったハーバーの施設は、十七年七月下旬までに、根岸競馬場建物とともに、敵性外人用として、六五人を収容する場所となったのであった。

「さらに太平洋戦争の緒戦の頃、コレヒドールから連れてきた外国人女性といわれていますが、ヨット倶楽部のハウスに入れられました。出入口や窓には、みんな板がこいがされて、物々しい雰囲気だったことが思い出されます」(新山下二丁目 貝道正一氏談)

十八年(一九四三)十月八日、このハーバーは「横浜市海洋道場」と名を替え、海洋少年団などの訓練地となった。そしてこの新山下地域一帯は、海軍によって収用され、軍事基地となったのであった。

しかしヨットは駄目になってもチャブ屋街での亭楽は、灯火管制下でつづけられたのであった。

「女の子たちは、昼間はモンペで防空演習にはげみましたが、夜になれば、本来の営業でした。お客は有名な人がずいぶん来られました。隊長クラスの軍人、軍需工場の経営者などがお客で、一般の人や兵隊さんは来ませんでした。軍人さんが来ると、いつも

羊かんの様な甘いものを持って来てくれますので、甘いものには不自由しませんでしたよ」と当時の女性経営者はいう。しかし戦争も激しくなった十八年、チャブ屋も廃業に追いこまれていった。三月二十四日「第一キヨ」、二十五日には「第三キヨ」というように、二三軒のチャブ屋はすべて廃業してしまつたのであった。さらに北方市営質舗も十九年三月に廃業して、その後再開されることはなかった。

例えば千代崎町の場合、新聞は次のように報道した。

「中区千代崎町二丁目町内会では、我家は我々で守ろうと隣組防空陣を更に強化して、過般来警防部挺身隊を〇〇名で組織しているが、昨今頻々と婦女子を襲う痴漢の出没に対し町内の不安を一掃せんと、昨夜より挺身隊員に依つて夜警が開始され、箕輪町会長、森川副会長の陣頭指揮に依る奉仕は町民の感謝的となっている」(『神奈川新聞』昭二十・五・二十一)

そして各町で、盛んに防空壕掘りが行われたのは、他の地区と同じであった。もとより男手の少なくなった町では、日雇労働者をたのむこともあったが、新山下町一丁目の場合には、一日一三〇円の割賃金を強請され、新聞に報道されたこともあった(『神奈川新聞』昭二十・五・一)。

また、北方国民学校の場合、二十年(一九四五)四月、二階の一部と三階、講堂とが海軍軍需部に収用され、他の教室は東京芝浦、小島製靴の軍需工場に使われた。



皇紀二千六百年記念の国旗掲揚塔―この地区での戦時下の名残り(上野町二丁目七六番地地先所見)

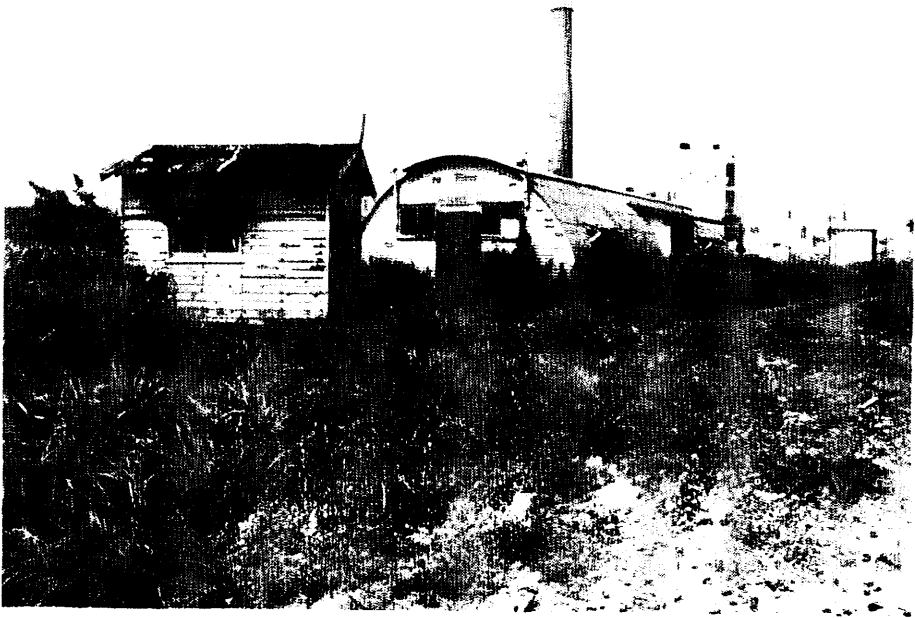
●海軍倉庫——さらに、根岸地区の柏葉と同じように、千代崎町二丁目角から見晴トンネルまで直線の戦時疎開道路が作られた。この道路は町の人々の利便よりも、見晴トンネルから新山下町の海軍倉庫に連絡させるものであった。

新山下のヨットハーバー付近は、海軍と軍需工場の日本造船などによって占められていった。それに貯木場周辺にあった材木商の岡田製材、後藤製材、東洋木材工業、中丸製材、飯田製材、亀井商店、川木屋、大森商店、木村商店、佐藤商店などの従業員は徴用工として、軍関係の仕事に従事し、本来の材木商としての活動は減退していった。さらにいままでの倉庫は横須賀鎮守府海軍軍需倉庫として収用されてしまった。

日本造船では、当時の徴用工の話によれば、「ここでは陸軍の青ガエルという体当り用の爆雷艇を作っていました。三〇分水上を走ればよいという舟でした」(小港町有志座談会)

日本海軍の倉庫のなかで、最大のものは、新山下町平地と山ぎわ、小港町境にわたる通称海軍倉庫であった。

町の人はいう。「ここに海軍倉庫が建てられましたね。倉庫の中には、旋盤からボーリング盤の機械類のほか、大八車、リヤカー、酒樽、自転車、鳥のエサ、やかん、モーター、大工道具、綿、ぞうきん、救命具、ワイヤー、地下足袋、自動車のスプリング、それにデッキブラシや亀の子たわしの果まで、兵器弾薬以外たくさんありました」(同座談会)



海軍倉庫跡地(昭和56年)——駐留軍接收地内でカマボコ兵舎が建っていた

そしてヨットハーバーは軍需用材木の筏溜りいぶだとなり、バンドホテルは軍の宿泊所となった。外国人で泊れたのはドイツ人だけである。それも戦争の末期には軍艦出入指令の発信所となった。見晴トンネルも片側通行となり、トンネルの半分は板がこいで区切られ、海軍の秘密工場とも、倉庫ともいわれるものになった。

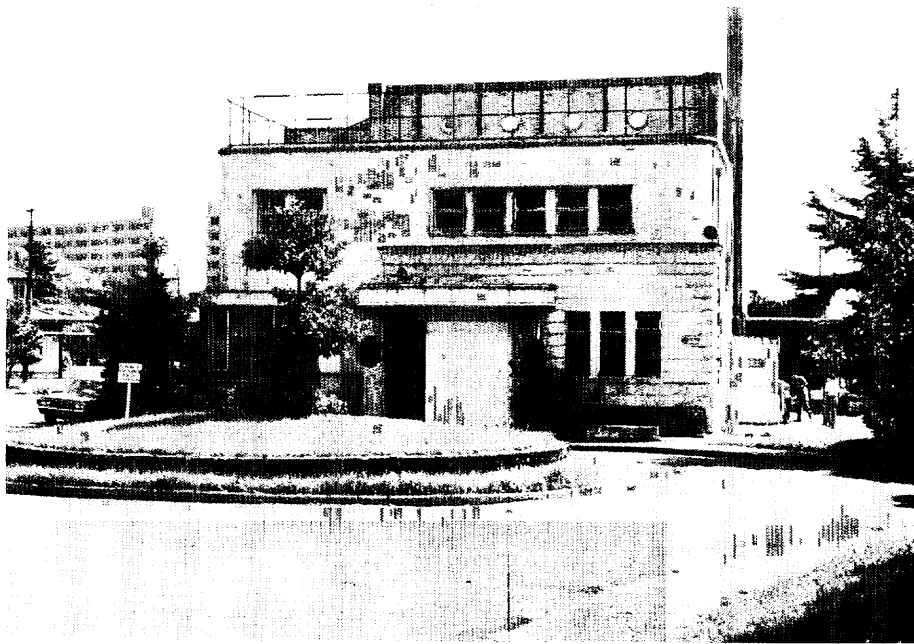
一方では十九年（一九四四）四月二十七日、新山下町の地先海面三万〇、一二四坪（九・九五ヘクタール）が市営の貯木場として埋立免許となり、埋立地には軍需工場用の敷地の拡大が計画されていった。

第三節●戦後の北方

(1) かんまんに復興

●焼け野原——昭和二十年（一九四五）五月二十九日、この地区も戦禍に見舞われた。それより先、二月十六日には千代崎町、五月二十四日には、山元町、日ノ出町とともに空襲され、西之谷町は若干の被害（『横浜の空襲と戦災』3巻）が生じた。しかし、五月二十九日の横浜大空襲は、本牧地区と同じように、上野町、千代崎町、北方町、小港町、西之谷町、妙香寺台、それに諏訪町とすべてが炎上し、新山下町を除いて多くの死傷者を出した。

千代崎町一帯は親子焼夷弾が落されて、二時間足らずの間で焼



スターホテルの建物（昭和56年）——チャブ屋の唯一の遺構， 接収地内にあったが昭和57年にとりこわされた

けてしまいました。昔の市電停留所のホームだけが、ポツンと残っていたのを思い出します。まさかこの辺は焼けないと思ってききましたのね。なにしろ麦田のトンネルを出たら本牧の海がずうっと見えて、この辺りはまったく平らになっていました」(千代崎町有志座談会)

チャブ屋街では、三時間にわたる空襲によって、ただ一店、この頃としては数少ない鉄筋コンクリート造りのスターホテルだけが、焼失も倒壊もせず残った。業者達は故郷や近県に移動し、一四〇―一五〇人いた女性たちは、そのほとんどが焼けたチャブ屋街から四散してしまった。

町は一帯の焼け野原となった。かつて、人魂が出ると子どもたちにも恐れられた、西之谷善行寺のうっそうとした森も池も沼も、見晴しのきく妙香寺の森もなくなり、町並みは一変した。そして、これらの千代崎町や上野町、西之谷町などには、日ならずしてぼつぼつと焼けトタンのバラックが並んだ。これは隣りの本牧地区とも同じ状況であった。

●戦災——小港方面では、「五月二十九日の空襲の時、今のベイ・サイドの所に町内の防空壕がありました。そこはどうも危ないので、山に逃げたら、小港の町がじゃんじゃん燃えるのが見えました。男の人は戦争に行つて居ません。残っている子どもは防空壕に入ればなしにし、婦人だけで消火をしました」(小港町有志座談会)

「私は二十年五月には戦争から帰つて来て、徴用になって小港でダイハツを作っていました。小港と元町の間は十四日の空襲で最初にやられました。チャブ屋の辺りも焼夷弾がジャリを落すようでした。防空壕にも入つていられず、小港の川に避難しました。後になって見たら、なんにもない一面の焼野原にはびっくりしました。小港では消防車も直撃を受け、運転手も黒こげになって死にました。

ふ頭の外にあった擬装艦をめがけて爆撃して来たので、この辺一帯はひどかつたんですね。擬装艦のつないである海は浅かったので、沈みようがないのに、それを目がけて、いつまでも爆撃していました。爆弾が落ちるたんびに、魚がいっぱい浮き上つて来ました。ソレツと船を出して魚を取りに行くんです。危険だなんて考えちゃいません。夢中でした」(同座談会)

ふ頭の外にあった擬装艦というのは、空襲の頃、新山下町の地の先の海面で、汽船を小型航空母艦に改造していたものであった。小港の戦災は海辺の一丁目ばかりでなく、本牧寄りの三丁目、チャブ屋街の二丁目も、ことごとく焼けた。

●米軍進駐——焦土となったこの地区のなかでも、新山下町はほとんど被害がなかったが、他の地区と同じように、米軍によって海軍倉庫はもとより、新山下町三丁目は貯木場を含めて一帯が接収された。貯木場は、米軍の上陸用舟艇の係留地となって、常時百隻以上の舟が浮んだ。日本造船の工場もほとんど接収され、海

軍倉庫跡には十二月三日、米軍の通信隊がひとまず進駐した。

戦災をまぬがれたバンドホテルも接収され、アメリカ軍の集結所として利用された。アメリカ軍は上陸後、まずここに入り、後に宿舎に割り当てられることにされていた。ホテルの接収解除は三十一年十二月となる。

町の人々は接収前後のことについて次のようにいう。

「海軍倉庫が米軍によって接収される前に、倉庫のなかの物資は海軍が大部分処分しましたが、海軍が引揚げるときに、地元にはローブとか日用品を少しずつ配給してくれました。けれども、その者が倉庫の扉を破って、残った物資を持ち出したのを何度も見ました。その頃のことですから、アメリカに接収されて持つていかれるくらいなら、日本の品物だ、戦争に負けた軍隊のものは我々市民の物さ、といったような感じでしたね」

「接収は早かったです。ブルドーザーを持ってきて地ならしをして、ばたばたとハウス（米軍兵士用の応急兵舎）を建ててしまいました」（以上、小港町有志座談会）

●ふたたびチャブ屋――しかし、この北方地区にあっては、こうした接収だけのことではなかった。外国にまでその名がどろいた本牧チャブ屋は、そのイメージから、上陸する進駐軍兵士らの慰安の場として、山下町のアパートと共に利用されたのであった。

「私は終戦後すぐ、時の警察部長に呼び出されたんです。恐る恐る

いきますと、部長は、早速だが、いよいよ近日中に連合軍が横浜に上陸してくる、こんどは君達が第一線に立ったつもりで、国家のために働いてくれ給え、ついては、君達は今まで外人の扱いには慣れてははずだ、慰安所を設置してくれと、頼まれたんです。

そこで、ただ一軒焼け残ったスターホテルを共同で利用して営業することになりました。この営業中、朝、昼、夕と二三人のMP（ミリタリー・ポリス）が巡視して秩序は保たれていましたが、営業を開始するや進駐軍は鉄砲片手に、押し付けてきましたね……」（北方町某氏談）そして、

「格別の事故もなく、営業がつづけられましたので、警察部長と署長から、おほめの言葉があったので、元氣百倍、ほっと安心しましたね」（同氏）

「この頃、米軍兵舎がスターホテルの近くから十二天にかけて、テント張りで三十ばかりズラリと出来ました。テントの内は重油発電機で、夜もこうこうといていましたが、スターホテルの方はロースクの光だけ。このあり様を見ていた隊長の好意なんですよね……向う様で電線や電球持ちで、分灯をしてくれたときは、そりゃ組合員はとび上って喜んだものです」（同氏）

しかし、慰安施設を開くと、性病の防止は絶対に必要なことであつた。もともと、チャブ屋街では、大正十年に警察の指示によって、経営者間で組合が組織され、月二回の健康診断が行われて

いた。同十四年頃から毎週一回に改められるなど、予防には努力がなされ、本牧チャブ屋街の特徴の一つとなっていた。

戦後もこうしたことは、さらに米軍の強い要求もあって、一段と強化された。診察に当たったのは地元医師渡辺熊雄博士（元神奈川県性病予防協会会長）で、スターホテルの一室で博士の献身的な活動が行われた。

しかし、この旧スターホテルの小港町二丁目やまわりは、接収一号地として接収されたので、業者は小港三丁目から本牧二丁目、旧市電通り裏一帯にかけて移転した。業者の数も昭和二十一年には六四軒に達した。ここには、米軍兵士によって、時ならぬ不夜城が出現した。毎日一回MPは組合代表を同乗させ、新しいチャブ屋街を巡視して治安を守ったが、このエリアには日本人は近寄ることができなかつた。戦後のチャブ屋は、場所をかえて繁盛し、ふたたび本牧や小港が歓楽街としての歩みをはじめたが、十年後の三十一年五月「売春防止法」の施行にともない、チャブ屋街は終末をつげた。かつての「紅灯」もここに消えたのであった。

チャブ屋街の唯一つの遺構となっていたスターホテルは接収され、米軍住宅のなかでクラブに使われていたが、五十七年三月三十一日の接収解除ののち跡地整地のと き取り壊された。

●ヨット競技——二十二年五月三十日、一部接収解除となった新山下町のヨットハーバーでは、横浜市・横浜体育協会主催、神奈

川新聞社後援の第一回開港記念ヨット競技が行われた。

「どっとおしよせた観衆にまじり進駐軍の兵隊さんも家族づれでハーバーに顔を見せ、さわやかな涼風に日本の初夏を満喫しながら『ワンダフル』の連発。約四十隻のヨットがハーバー狭しと快走するデモンストレーションに続き、知事杯、市長杯をめぐり学生および一般人の対抗戦が行われたが、試合にさきだち、石河市長がミナトヨコハマの市長さんらしく、海への「ウンチク」をかたむけたユーモラスなあいさつも、ほほえましい」（『神奈川新聞』昭二十三・五・三十一）と報道された。

次いで二十四年秋、第四回国民体育大会が東京で開かれたが、このときもヨット会場となった。戦後の混乱のなかで、いち早くヨットレースが行われたのはいかにも横浜らしいことであった。

しかし、海には風をはらんだ白帆が浮かんだものの、内陸部のそれぞれの町では、戦後の復興に汲々としていた。

●鉄神輿——復興はすでに、焦土から立ち上った二十一年（一九四六）六、七月頃からはじまっていたが、二十三、四年には戦災者用簡易住宅、組立式のバラックが少しづつ建てられはじめた。北方皇大神宮の祭礼も、昭和二十四年夏祭から復活した。千代崎町では、翌年にみこし（神輿）を早くも製作した。地元の人々にとっては、この神輿ができたことは喜びであった。

「昭和二十五年、この町では鉄の神輿を造りました。いろいろ苦労しながら鉄工所の北田さんと、その職人との手作り神輿でし



わり歩く鉄神輿——千代崎町三丁目
〈木宮義信氏提供〉

た。屋根のところが一番難かかったそうですが、非常に精巧で素晴らしいものです。飾りは東京の専門店に行くと、品数は少なかったが売られておりましたので、そこでそろえたのですが、飾りの鳥（鳳凰）が二万円しました。北田さんが自費で造り、町へ寄付したんです。今の神輿がそれです。大人八人で担いでもフラフラするほど重いですよ。みな担ぎたいのでけんかになったりしました。

戦後、みこしを出したのは、ここが一番早かったんじゃないですか」（千代崎町有志座談会）

千代崎町三丁目会館には神輿を造った趣意が記されている。

「 鉄 神 輿 重量五六〇Kg

製作年月 昭和二十五年八月吉日

製作人 横浜市中区千代崎町四ノ一一九 北 田 鉄 工

社長 北 田 平 治

大 菊 文 雄

創 意

戦争の悪夢から漸く覚め、人心も日に安定し来たる際、更に生活意欲を盛り立てんと考え、日本古来の祭礼の復活を念じ、鉄神輿を製作して人心を鼓舞せんと発心起工したが、如何せん、当時は現在のように工作機械は整備されておらず、フィゴ、ハンマー、ヤスリ等を主たる工具とし、実に製作日数約六ヶ月を要した全くの手作りの神輿である。

文書 木 宮 義 信

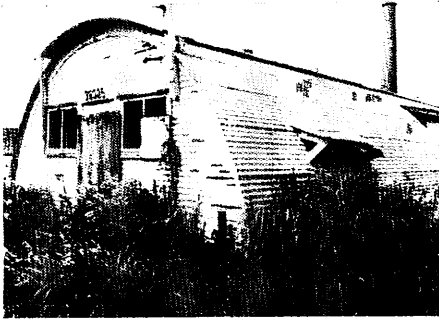
これはこの町にとって、戦後復興のあらわれの一つといえる。

町が少しづつ復興するなかで、新山下町はいよいよ本格的に接収された。

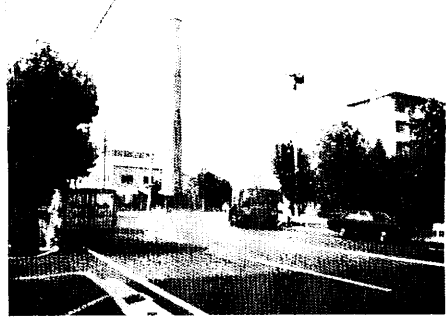
●米軍住宅建設——二十七年（一九五二）関内や関外地区の中心部が接収解除になると、その代替として三十一年五月、国費をもって、鉄筋アパートの米兵住宅二〇棟が三丁目建てられた。土地は五一、九五三・〇六平方メートル（うち国有地三七、五七六平方メートル、民有地一四、三七七・〇六平方メートル）。建物は二四、六六九・一八平方メートル（国有）で二〇棟五〇〇室である。施設名は新山下住宅地区（FAC3166）で、アメリカ名称はShiyamashia DH Area (Bayside Courts)、アメリカ海軍横須賀基地分遣隊の管理下にあつて、独身将校の宿舎、出入国のアメリカ軍人・軍属とその家族の一時的な宿舎として使用され、図書館、将校クラブなどの付属施設が設けられた。

さらに、小港二丁目の隣地にある、かつての海軍倉庫の丘にはエンジニアのセクション（Yokohama U.S. Army Engineer）とその附属の建物が建てられた。

「昭和三十年でしたか、まだまだ、日本人はロクに住宅も建てられなかった頃、アメリカの兵隊のビルがどんどん建てられましたね。ものすごくでっかい建物でびっくりしました。うらやましいやら、くやししいやら。当時四階建ての住宅なんてめずらしいですから……。ああこれで三丁目もおしまいか、と思いましたがね」



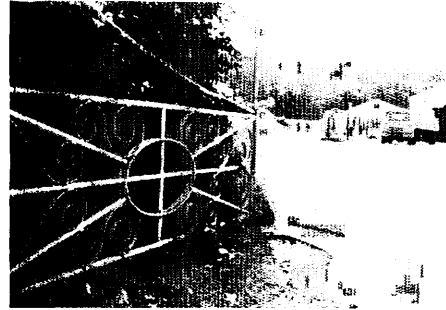
カマボコ型兵舎、区内では最後までここに残っていた



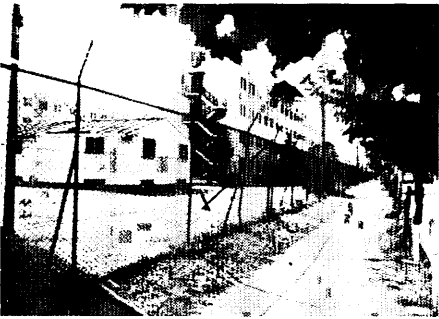
米軍の施設——煙突の左手につづく



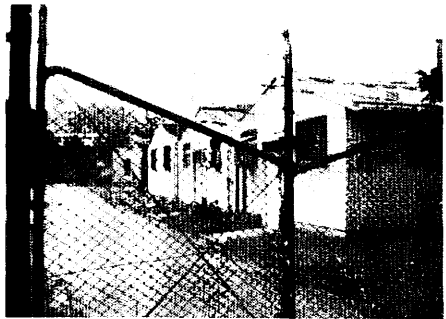
山手の丘から米軍鉄筋建物を見る（右手前4階建棟
左手は新山2下丁目の街並み）



施設のゲート、向って左側は旧海軍倉庫の地点



道路ぞいの旧米軍鉄筋建物



切妻形の旧兵舎



米軍のボイラー小港橋わきにあった



構内、左手の森は山手の丘のはずれ



正面ゲート、閉鎖されたままになってる

(小港町有志座談会)

兵舎にはカマボコの型をしたものがあり。主に兵士の宿舎や事務所として使われ、また切妻型は将校や婦人兵士に使われた。ともに構造材は鉄骨、外壁は部厚いトタン張りで、いずれも前線の仮設兵舎で、通風、採光が悪かった。

この地区にとつても、接収と復興とが交錯する戦後であったが、本牧の一号地、小港町三丁目、新山下一丁目などの接収は、この地区の発展を大きく阻むのであった。

(2) 増加する交通

●団地ができる――こうした接収は昭和五十七年(一九八二)までつくことになるが、接収をまぬかれていた小港町地先海岸埋め立て地には、昭和三十三年十一月、日本住宅公団によって、鉄筋四階建て一六棟、六五〇戸の小港団地が建設された。「海と港の小港団地」のキャッチフレーズによって、入居の応募者は多く、すぐに全戸の入居がきまった。

「団地のところには護岸工事をはじめましたが、陸はさほど海より高くなかったので、そこで釣りが楽しました。アナゴ、ボラ、カレイ、ハゼなどでしたね。団地の南側になっている山下・本牧・磯子線の道路は交通量が少なく、みなバス通りと呼んでました。昭和三十三年当時の二十歳台の男性にとって、かなり高給でなければ入居資格がなかったので、生活は大変でした。家

賃が払えなくて退去した人もいました」(小港団地有志座談会)

「団地のまわりは海で、風通しがよくって扇風機などはいりませんでした。小港にはチャブ屋があったので、入居の時は子どもの教育上良くないのでは……と心配しましたが、入居してからは、その店もなくなってしまうので安心でした。潮風が吹くので洗濯物がパリット乾かないとか、テレビのアンテナや金具類、自転車が入り込んで困ったものです。護岸工事前の入居の頃は、台風が来ると三メートルぐらいの高波で、海側の一階のベランダに波が入って来るんです……恐ろしくって逃げだしたものです」

(同座談会)

「入居翌年、皇太子のご成婚にあやかって、出生率が増加し、いろいろな問題が起きました。保育所を作りたいという有志の人達が集まって、青空保育を始めました。昭和三十七年頃でした。集会所を併りて、青空保育園をはじめ、六〇名の子供達の面倒を交替でみていました。現在もひまわり幼稚園として自治会が運営しております。それが自治会が出来たきっかけとなったのです。

自治会は昭和三十七年九月に創立されました。当時の自治会は必要から生れた組織なので、みんな協力して活動に努力しましたね。入居当時は、隣接の古い地元の町内会とも交流はなかったのですが、いまは近くの町内会とも親密になっております」(同座談会)

小港団地は中区の高層団地の草分け的存在で、小港町埋立後、

建設直後の小港団地



市街化の最たるものといえる。

しかし団地以外で小港に住む人のなかには、つぎのような声もある。

「私は終戦後にここに来ました。公団が出来る前は海に近く、いい所に来たと思って喜んでいましたが、二、三年たつて団地ができ、錦町工場埋立地ができ、そこに下水処理場が設けられました。が、そうしたと同時にトラックの交通量がふえ、毎日地震の中で生活しているような感じがします。今では、あてがはずれたというのはこのことだと思ってます」(同座談会)

こうした団地ができて、海岸がせめめられてゆくなかで、ヨットハーバーは相変わらずの盛況を見せていた。三十四年十月、第一四回国民体育大会のときには、ヨット会場となった。このとき皇太子が天皇の名代として臨席、一時間にわたって観戦された。

「日本広しといえど、このように宮様方のたびたびのご台臨を得たのは、この新山下のヨットハーバー以外にはまだないと思えます」(西沢老松町 千野純次氏談)

しかし、ミナト横浜にあつてこそそのヨットハーバーも、本牧ふ頭の建設によって消えることになる。

●本牧ふ頭——二十二年の民間貿易の再開は、戦後の市民に希望の光を与えたが、ふ頭の不足はどうしようもなかった。そこで三十年代前半に新山下町三丁目貯木場のわきから、本牧十二天前面の海をおおいかくす位置にふ頭建設が計画された。

この計画によって、新山下町周辺は大きな転換期を迎えることになった。三十五年以降、もとの日本造船の所有地は、港灣関連業者に分譲され、戦前からの八企業のほかに日本大洋海底電線株式会社、高田工業株式会社などの工場。富士、宇徳運輸、楠原、藤木企業などの倉庫業が、接収地を除いた運河から貯木場寄りに進出してきた。大正十一年工業誘致のための埋め立ての目的は、ようやく四十年後に実現することとなった。

三十七年(一九六二)には市立港灣病院が近代的施設をもって新設された。三十八年四月、いよいよ本牧ふ頭の埋立が開始され、四十三年四月江の島へヨットハーバーを移転させた後、ふ頭は四十五年五月、供用が開始された。それに加えて、四十九年四月、貯木場は水面荷役の不便から金沢区幸浦の新しい貯木場に移された。

●コンテナ街道——本牧ふ頭開設によって、それぞれのふ頭から陸揚げされた輸入貨物は、金属製の大型の箱、コンテナに詰め込まれて、各地に陸送されてゆくことになったが、大型自動車が無数に新山下町に出入することになり、車の洪水が引き起された。この町の人々は、物資輸送の自動車の騒音排気ガスになやまされることになった。ここは国道三七五号線、主要地方道山下・本牧・磯子線という長い道路の名よりも、通称「コンテナ街道」と呼ばれ、コンテナ輸送の大型車や一般の車両ひしめき、交通渋滞の難所ともなった。



コンテナ街道

一方、新山下町は、工場・倉庫の町と変わり、著しく変わったが、四十五年四月一日、中区ではじめての住居表示変更が行われた。新山下町は廃町となって、もとの丁目をとって新山下一丁目、新山下二丁目、新山下三丁目と三つの町が誕生した。

●湾岸道路建設——市では地域の交通量が増加するばかりなので、東京湾に沿う道路(湾岸道路)を建設することによって、これを解消する施策が計画されていた。その上すでに、別ルートの道路である関内と関外の境に流れる大岡川に、首都高速横浜羽田線が開通していたが、四十九年頃にはこの計画道路線と既成線の道路とをつなぐために、花園橋のランプから堀川の上を高架で渡し、新山下橋の先に出るといふ横羽線第二期分工事が計画されていた。しかし、地元との調整が遅れ、五年ぶりの五十三年十二月にこの工事が着工されたのであった。

●環境整備計画——横浜市と日本住宅公団は新山下地区の環境調査を行った。調査の目的は、五十六年六月発表された『新山下地区居住環境整備調査報告書概要』によれば「従来から居住環境整備が必要であるとされていた新山下一・二丁目地区の整備と、このための接収跡地の有効利用のあり方の検討」を主眼としたもので、その調査対象となったのは、山手のがけ下にある固有地であった。がけによる日照不足問題やがけによる災害危険区域などであり震災後に建てられ、不法占拠のかたちになっている住宅にも及んだ。

現在、調査の結果にもとづき将来構想が考えられている。

●接収解除——こうした計画も、来るべき接収地区返還を予想してのことであった。五十七年三月三十一日、この地区の米軍接収は、市民待望のなかで本牧と一緒に解除、土地が返還された。

(3) いまの北方地区

●上野町——現在の北方地区の中心的な地点は上野町といえよう。一・二丁目を抜ける主要地方道の南側表通りには、商店街が形成されている。上野町一・二丁目商栄会(会員三五人)で、日常買廻り品の商店を主とするこの商店街は、麦田町、本郷町、本牧町一・二丁目の商店街とつながり、その一区画となっている。

この二丁目には唯一の公共機関の北方郵便局がある。主要地方道の南側商店街のうらは、地元町内会の協力によって、千代崎川には覆蓋がされていて、このコンクリートの上は児童の遊び場となっている。またところどころに橋の名残りが見られる。

上野町三・四丁目は山手町に通じているが、すでに述べたキリンビル時代のような繁盛は見られない。

妙香寺台は、かつてあたかも門前町をなしたような景気は見られず、商店街の形成までになっていない。妙香寺にはその石段入口に「君が代由緒地」の石碑が立っている。最近本堂が改修された。

●キリン園あたり——千代崎町では、一丁目のキリン園公園の下



妙香寺台風景



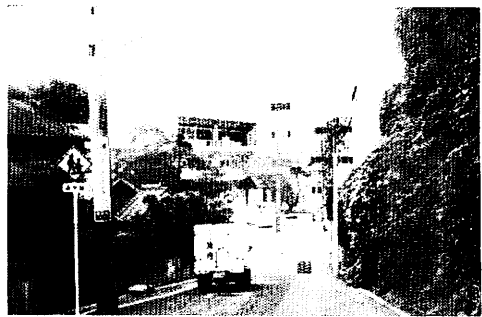
上野町の町並み、もとの上野町銀座通り



麒麟園公園（左）とピヤザケ坂



箕輪邸跡（千代崎町2丁目71）



北方小学校——新築校舎は新しい景観となった



北方皇大神宮



西之谷の坂——善行寺の森は右手の先に見えている

あたりは、比較的広い敷地を持つ住宅が多く、表通りに向うにつれて、住商混在の地域となっているが、整然と区画された住宅地である。山手の丘下、二丁目の旧箕輪邸跡地の関東財務局千代崎住宅の、四階建てと五階建ての二棟の建物が目立つが、このほかに高層の住宅はない。

諏訪町は、山手の丘のすぐ下で、数軒の商店に諏訪神社、北方小学校がもとのキリンビール会社跡地に広い空間をなしているほかは、普通住宅がならんでいる。かつての山手居留地入口としての^{みもかけ}の^{みもかけ}は、わずかに校内のビル井戸やレンガ積石垣に見るだけである。

主要地方道をへだてて、この地区としてはとびはなれた地域にある西之谷町は、町域の入口に当るのが北方皇大神宮で、その尾根道はいわゆる大神宮山といわれる丘、それをへだてて善行寺前の通りとなるが、このいずれもが、丘といわず丘下といわず一帯の住宅地となっている。山の中腹大神宮山の端末にあたる善行寺の墓地だけが広い空間を占めて、ここにはみどりが保たれている。

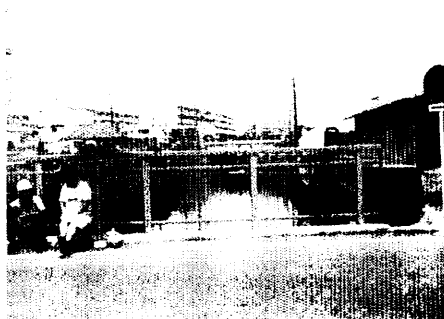
●北方町——一方、北方町は山手町の下にあたっているが、一丁目は千代崎町の地つづきの住宅地であり、旧道のかたわらの北方老人憩の家（旧、市営北方質舗）が地域の人々の集会所となっているほか、静かなたえずまいの町である。特に山手の丘に沿う旧

道は、その狭さのなかに旧道のおもかげをしのばせてくれる。北方二丁目の端はワシン坂下にあたり、ここには商店がならぶ。ちょうどこの地点は千代崎川の覆がいがなくなったところで、道路の一部となってしまった東泉橋からは、千代崎川の流れが見られる。

●小港町―小港町は、北方町に接し、さらに山手の丘の下と本牧二・三丁目、本牧十二天に接して広がる一帯だが、二、三丁目の大部分は接収されていた。五十七年（一九八二）三月三十一日によくやく解除されたが、その跡地の利用は計画中である。

千代崎川河口にかかる小港橋は交差点となって、本牧ふ頭のと元に向って道路をはさんで向う側はもとの接収地である。ことに交通量が多い。三丁目の片側は商店や自動車関係の店が比較的多く、主要地方道山下・本牧・磯子線の小港交差点で、その角地は山手警察署である。町にはアソカ幼稚園と西教寺がある。一方、小港橋交差点わきには、日本住宅公団小港団地一六棟（各五階建て）が海に向って並んでいる。団地の前に数店の店舗が見られる。この道はコンテナ車など大型車の交通がはげしい、いわゆるコンテナ街道である。

●新山下―新山下各町は、さきに述べたように、震災前後からの埋立により発祥した地域で、この土地利用は、山手の急斜面下のベルト状の住宅地域を除いては、新山下運河を中心とした倉庫地帯や、市設貯木場をめぐる港湾関連企業の建物がならぶ地域で



千代崎川の川口―東泉橋、向うは小港橋



北方老人憩の家



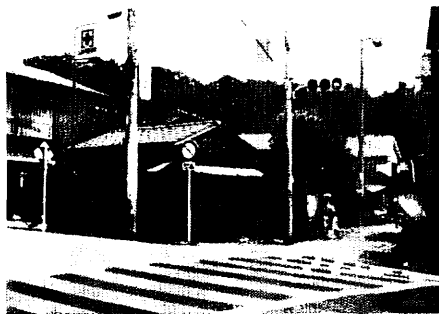
小港団地



北方町の旧道



接収地の一角に建つ山手警察署

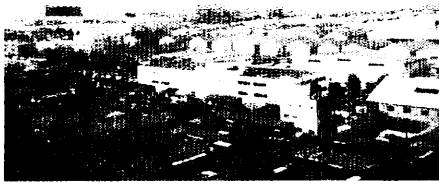


旧道の入口（北方町1丁目5番地派出所前）

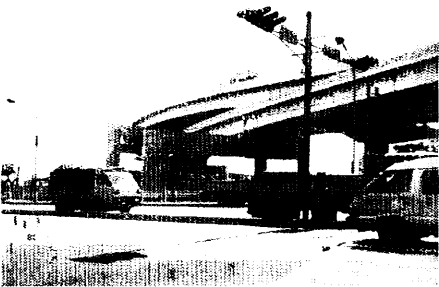
ある。新山下三丁目には米軍新山下住宅地区として大小合せて一七棟、うち七棟は鉄筋造りの米軍宿舎であったが、昭和五十七年三月三十一日に接收解除となり、後も鉄筋建物がまだとりこわされずにある。

新山下地域の入口は、新山下一丁目のバンドホテルが、その玄関口になる。ホテルの裏手には、五階と四階建ての税関新山下橋宿舎や法務省新山下住宅があつて、ここから住宅地域が続くことになる。このあたり、新山下商栄会（会員二〇人）の商店がつづいているが、この街並のうしろ、新山下運河河口には五軒程の釣船の店がある。漁場を失なつた人々の転業の店だが、ここにはかつての海辺をしのばせてくれる雰囲気がある。新山下運河には、新山下一丁目側から霞橋、新開橋、見晴橋、鷗橋（かみか）がかけられている。直線の運河の両側には公共機関、倉庫群がある。それと並行して小港方面に走る主要地方道（コンテナ街道）の両側にも倉庫が並び、関連企業の高層住宅が並んでいる。

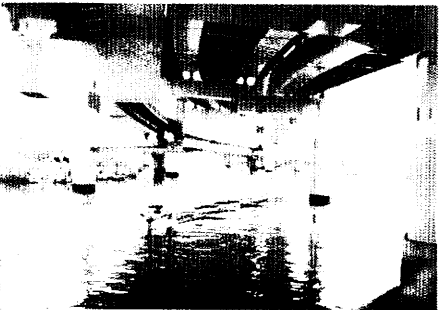
公共機関には、農林水産省横浜植防疫所、横浜市港湾局港湾工事事務所、横浜市港湾病院、横浜電話局本牧分局、横浜市水道局船舶給水営業所などがある。倉庫群のなかには宇徳運輸倉庫、乾倉庫、富士倉庫、楠原倉庫などの大きな建物が目立つ。こうした公共機関、倉庫群のなかにあつて、勤労者が入居している高層住宅、五洋建設アパート（四階建て）三棟、楠原倉庫新山下アパート（五階建て）二棟、ネオコーポ（六階建て）、市営見晴橋住宅



倉庫群のある新山下町二丁目



高速道路



高速道路—山下橋わき



船宿のある小路



新山下の運河

(四階建て)などが続々と建ち並んでいるが、これらは港内に向かっけていて眺望がよく、恵まれた環境のもとにある。

新山下三丁目にも、貯木場のまわりをめぐって倉庫業が多い。

いま、これらの企業活動の助成、コンテナ輸送の円滑化を図るため、堀川の上に首都高速道路が工事中である。今後新山下は交

通の要衝となる。

この地区においては港湾周辺の地域・接収解除後の街づくりなど、今後の土地造成、そして既成の住宅市街地など、多くの問題をかかえている。